日清大合戰

166
358
501

特29

かちいくさ

寒英作

旭日の御旗のさす影に
大和魂を奮ひつゝ
虎伏す野邊を踏分けて
平壤城に黄海に
旭の御旗押し建てゝ
虎伏す山路さかしくも
龍住む海路底深み

天丈夫

寒英作

雄かぬ敵のあるべしや
烈しき銃音かざす太刀
蛟龍住む江も打渡り
いとも目出度き勝軍

祝平壤大勝

照月作

野分して今朝は美くし富士の峯
進む王師に敵はあし
雍て拂へよ醜夷原
撃て沈めよ醜夷艦

鶯谿

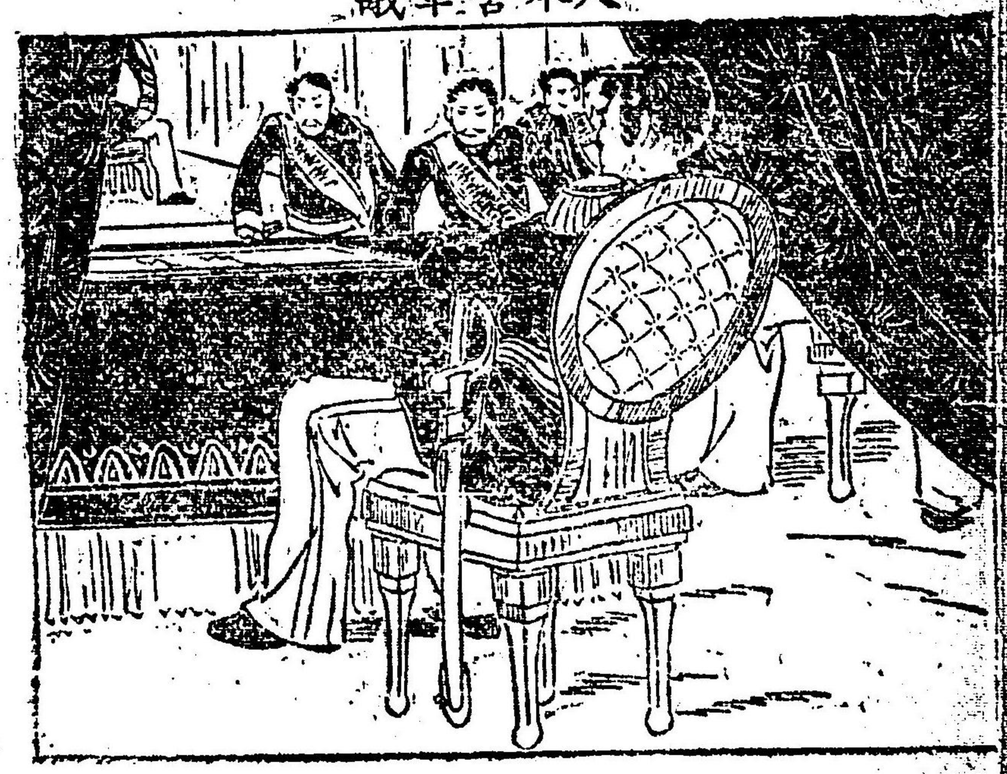
大激戰我軍隊全捷

勝海舟

ほこ執て大丈夫等
渡るらむ
鴨緑江の
浪高しとも

指て行く我日の御旗
あさ風に
雲吹拂ふ
高麗のしら山

大本營軍議



山木樵夫編輯

慘怛なる陰雲は凝つて天地に塡塞し百鬼夜行血を吸ひ骨を嚙むの酸狀を呈出して國運危頽に淪まんとし黎民塗炭の苦艱を受けんとす是ゞ朝鮮國内に興れる東學黨の騷亂にあらずや今や東洋の獨立を維持して以て泰西强國の垂涎を拒ぎ鼎立して大勢を擴張するの大關係を有し貿易商工百般の事に至るまで大影響を來す朝鮮國にして此不幸に陷りしとは我日本帝國は草帶水呼べば答へん隣邦に接し幾多の人民居留するあれば何ゞ點視するを得んや保護の軍艦兵士を派遣し國際上日韓の交渉談判要求する所ありしが破れんとして危きに成りければ即ち弊政を改革して諸獨立國と並列せしめんとせしに竟に日清兩國の衝突を生じ東洋の平和忽ちに破れ戰端を開きて血を流し骨に曝すの不祥不吉なる干戈の間に往來し交戰既に幾回警報飛電瀕々耳朶を衝く是に於てか神州の靈氣立ろに振ひ倭魂一時に發揮し特有の日本刀を磨ぎ扼腕昂起大に盡忠報國の道を致さんとし國民一

政協力邦家の爲めに一身を犧牲に供せんとす同胞諸士の武勇眞に頼母敷哉……奮へよ
四千万の同胞諸士……勇めよ神州有爲の男子……示せよ大日本帝國の武威を……
凱旋の日期して待つべき〻

○東學黨の暴擧

朝鮮全羅道全州地方に東學黨の蜂起し府使以下三十四人を殺し勢ひ猖獗將に京に上らんとすとの飛報京城に達せしより政府は早速陸より數百名仁川より海路にて蒼龍海龍の二汽船並に同港碇泊中の支那軍艦をも艤して總數八百余名の朝鮮兵士を派遣せり又此兵士は麵包千斤余野戰砲四門彈藥四百箱を用意し行けり之れを要するに東學黨の暴擧は烏合の衆殊にも兵器の準備もなき事なれば平定近きにあらんか

○全羅道古阜の民亂と其の巨魁

朝鮮全羅道古阜の民亂を起す東學黨も之れに加はり操縦進退するより其勢力日增に猖獗とおり遂に縣官を火殺する等兇暴益々甚しきより已に洪兵使を兩南招討使とおし親軍壯衛宮の兵士八百を蒼龍漢陽幷に支那艦威靖號等に乘せ仁川を發し全羅道に向ふ全羅道古阜の乱民巨魁は崔時亨なる者にして嘗て兵を擧げしも時運適せず身を脫して兩湖の間に逃れ竊に時の至るを待ち鋭を養ひしが全羅道ころ建業に屈竟なりとて今回此地に興りしものなり而して其滿懷規模遠大なして崔の人と爲りも幾分か見るべきものありと云ふ

○東學黨暴擧の起因

東學黨が根本の地として堅守するは無論古阜郡にして暴擧の起因は該郡守の苛政に出づ即ち昨年十月郡民其郡守の貪慳暴欲なるを憤り官廳に强請する處あらんとせしに郡官猥猥して全州に走り監司の敬護を請ひたり因て郡民等も亦賂ひて監營に哀願する所ありしに監司は是れに對し頗る冷淡なる取扱をおし加ふるに乎國家緊要上郡官に命じ汝等に對して不時の徵發をおさしめたるものなれば決して郡官の虐政と云ふべからずと虐使を辨護せるより郡民益々激昂し此上は自から冤憤を雪ぐの手段を決行すべしとて一旦告

阜に引揚げ其全勢を以て近傍の官廩を破壞して數万石の米穀を奪掠し之を戸口人民に分與し次で官衙の軍器を取り俄かに軍陣の用意を整へ本年陰曆二月頃に及んでは保國安民唱大義抔と書したる大旗を飜し茲に全く謀反の大決心を露出するに至りたり然るに四隣亦時政を快とせずして之れに投ずる者多く竟に東學黨の分子をも與へ其人員一千六百に至りしかば陰曆四月一日先づ兵を進めて全州を去る七里許りなる丘陵に胸壁を築き山を負ひ平野を前にして陣營を設けたり此の報監營に達したれば監司は直ちに營將李昶鎬に營兵三百を附して進發せしめたるに陰曆四月四日の早天敵の一隊は山麓を迂回して潛かに軍を官軍の側面に進め放砲吶喊し本軍と相呼應して官軍を挾擊したり官軍は此不意の襲擊に防禦の遑なく兵器軍糧を遺棄して敗走し李營將已下兵丁六十余名戰沒す第一戰の勝利大に黨人の軍氣を燥んにし以後草間の壯士爭ふて之れに歸し黨衆日に加はる事五百乃至一千の多きに至ると戰地方より歸り來れるもの語れり

○飛電頻々賊勢猖獗

（朝鮮新報ニ依ル）

舊四月十四日辰刻全州監司發電に曰く今靈光府伯の報ずる所によれば一昨十二日彼徒万余人城中に闖入し居民を刼散す鎭定の策なし惶怖に堪へず◎同十五日錦山縣監發電に曰く賊情を探偵するに殆んど三千の多きに至る又懷德縣に於て銃一銃十六彈丸七十三弓一張を掠奪せらるに付屬吏に命じ取返しの法を謀る◎同十六日招討使發電に曰く江華の海軍何日到着するや軍刀拾柄と上等の雷鐘送附せよ兵候元世祿行術判明し招還せり李斗黃李學承をして二隊の兵を率ひ金溝、泰仁、井邑、高敞、興德の地方に向はしむ◎同十七日全州監司發電に曰く彼徒の動靜を探偵するに一は靈光に留在し一は咸平に向へんとす而して京軍程を急ぎ彼の住處に赴かしめ將さに開戰せしめんとす今曉取敢へず二隊の兵を送る又曰く招討使京軍二隊の兵を率ゐて先刻彼徒の屯處に赴けり◎同十八日全州監司發電に曰く轉運使火輪船に乘じ稅穀を載せて下往する所へ東徒來りて捉ゑ去る依て之れを取り返す爲め早速屬吏を急派せり

○賊兵城を奪ふて之に據る

東學の軍茂長より二手に分れ路を轉ずて鹽光に馳す鹽光の府使閔泳壽走りて難を七山洞に避く党人一万乃ち城中に入り兵器彈藥を奪ひ城門を嚴閉す曹正言金邁士を初め其令に從はざるもの殆んど屠殺の難に遭んとす而して彼等此城を堅守し以て官軍峻拒の計を成さんとす頗る憂ふべし

○東軍の占領地

現今全羅道に於て東學黨の占領せし地區は凡ろ左の如し而して各夥多の兵を以て之れ嚴守す

羅守兵八百余人（京城を距る六十六里廿四丁）
光陽守兵千百余人（京城を七十二里十六丁）
扶安守兵三百余人（仝上五十里廿四丁）
興德守兵千四十余人（仝五十六里半）
高敞守兵六百余人（仝五十六里三十二丁）

錦山守兵八百余人（仝四十里）
又た二百將及副將の兵營は寶城近傍にあり總勢凡ろ一万六七百人にして尙日々增加の傾きあり

○東軍韓兵を鏖殺す

全羅地方東學黨の兵勢益々猖獗昨夜三個の木砲を放ちて錦山の官兵二百余人を鏖殺せり但し金提に押出したる賊兵八百余人は官軍の爲めに破られ五十三人捕獲せられたり韓廷にては尙ほ鎗兵若干を進發せしむるの準備中なりと（五月三十日京城發電）

○國王殿下敎示を下賜す

一古阜の郡守趙秉甲は格を俱し命へ來つて南間に囚せよ
一其以外の地方の守令と雖貪虐なる者は一律之れが罪を論じ以て民心を定めん
一大臣以下末官に至るまで此板蕩の時に當り何ぞ垂手傍觀す可けんや特に輔國安民の策

を献じて可なり

一全羅監司は特に越棒の典を施して可なり（罰棒）

一逃走せる各守令は罪の輕重を論じて其處治を爲すべし

○政府の亂民鎭撫の訓令

東學の徒軍勢を合して鋒光に聚まりたるに付招討使乃ち京軍を領し過日既に其地に向ひ今や將さに一大決戰を開かんとする折論旨忽ち下りたれば暫らく鋒を斂めて其論旨即ち完伯（全羅監司）を罷黜し古阜の郡守趙を捕へ來り以て慰撫の意を示されたるを布告す而かも爾後尙ほ歸順せざるものあるに於ては已むを得ず將さに京軍を以て討滅壓殺せん

○清兵派出

東學党勢ひ頗る猖獗京軍爲めに動搖し叛兵既に泰安に達したりと泰安は仁川を去る僅々二十里清兵出發の準備をなす而して朝鮮京城と支那の旅順港とは僅々二十四時間にして流船通航し旅順港には五千の兵何時にても出發するの準備ありしと抑も東學黨の蠢起りしより支那政府は一層注目し居たるが朝鮮政府は東學黨の鎭撫とても六ヶ敷くと思ひ袁世凱に援兵を請ひけるに袁氏も直ちに承諾する能はず電報を以て直隸總督李鴻章に紹介し李氏は承諾して直ちに旅順の兵五千を出發せしめたりと而して是等の兵士は京城に向ふか戰地に向ふかと云はゞ清國の出兵は素より支那人保護にわらず東學黨鎭撫にある事なれば直ちに全羅忠清二道に向て出兵したるなり

○大鳥公使の出發

韓京駐留日本公使大鳥圭介氏は六月五日八時朝鮮に向け出發したり外務參事官本野一郎氏も同公使に隨伴し警視廳巡査二十名は警部高崎氏引率し一行に隨ひ出發したり朝鮮の風雲次第に切迫し清國已に出兵す日本政府亦之れに應せざるべからず警衛嚴重ならざるべからざるなり

○在韓日本人電信の不便に付き

兵乱の時に際し最も必要なるは電信なり朝鮮國に電信四線あり一は仁川京城間二は京城義州間三は京城釜山間四は京城元山間是なり此間日本に最も必要なるは京城釜山間の電信なれども此線路は叛兵の巣穴全羅道を經由するが故に疾くに切斷せられたり故に京城仁川在留日本人にして日本に電報を發せんとせば義州線路即ち支那政府の所有線を使用せざるべからず平時ならば義州線を使用するは只電信料の損のみなれど戰時ならば義州線は我政府人民の用を爲さず實に遠慮千万なりと某は歎息したり（毎日新聞抜錄）

○官賊両軍の比較

東學党の叛旗を飜し天下に大呼するや連戰連勝全羅大半の要所を占領するに至れり故に今日古阜石城等に於ける兩軍の勢ひを察するに賊軍は日夜に其勢力を倍し官軍は日夜に其勢ひを沮喪するの有様にて到底官軍の勝利は覺束なきもの〻如し殊に賊軍は地方豪商富農の爲めに夥多の金穀を貯へ糧飼には毫も差支なし只だ困難なるは軍器れ破損を修補するに道なく且其不足を補ふの術なきにあるもの〻如し但し軍中には大工其他の技術に巧なる者もありて木砲弓箭等は自在に製造し又た例の投礫術に長じたる者七十余名一手にぶり接戰の際には必ず先登して官兵を惱まし其術の巧妙なる四十間以内の距離に於ては百發百中一として之れを誤るなく戰ふ毎に功を奏すると又其戰隊を分事左の如し

砲銃隊　鎗隊　弓隊　投礫隊
斥候隊　騎兵隊　輕重隊

此他會計糧食醫師等の備充分にして之れを官軍に比すれば其勝る事數層なりと云ふ（六月二十七日京城發）

○勢力の大小

東學党の軍器は多くは全州監營を陷れたる時に掠奪したるものなるが同監營に備へたる銃砲は僅かに千余に過ぎざれば官軍にして賊に降りたるものは悉く銃砲を携へ居るを以て全州落城後の東學党は其勢ひ實に猛虎の檻を脱したるが如く沿道の壯丁にして彼れに與するもの日に其數を増し目下其の總勢四万余人と見受けらる而して土民の壯丁は

多く木刀竹槍を携へ、且つ東學党に下りたる官軍の多數は獨逸若くは佛國の新式を練習し多少軍隊の進行軍隊の組織に熟し居るを以て賊軍の運動は頗る快活かり兵糧の如きに至つても党中には豪農紳商を呼はるゝ者も多少味方し且つ武威を恐れて米麥を給與するものの少なからざれば彼れ等は更らに糧食に差支を生ずる事なし

朝鮮の各地方官は大に東學党の勢に恐れ中央政府に向て頻りに援兵を請へり彼等が東學党の實況を中央政府に報告するには針小の事實を棒大にするを常とす故に賊軍内部の模様及び其の實力等は京城在住の者には確知するを得すと吁韓廷の弊政は嵩みに嵩み閔族權を專らにしたる當時は又如此乎又昨年忠清道の懐仁に東學黨の乱起るや中央政府は魚允中を安撫使として派遣したり允中數十の兵士を引き連れ懐仁に出張し恩威を以て百方彼れを慰諭し遂に解散せしむ本年も亦政府内部に允中派遣の説起りたるやに聞けど今日とおりては到底温言を以て解散せしむる事能はざるを知り安撫使派遣の説は中止したり

○日清韓の距離

風雲益々急に往復頻繁おり左れば其里程を知るの必要大なれば即左に其大略を掲げん

（里程は海里）

仁川より長崎迄	四百五十八里
仁川より下の關迄	五百里
釜山より長崎迄	百六十二里
釜山より對馬嚴原迄	六十六里
釜山より下ノ關迄	百二十二里
對州より下ノ關迄	九十九里
仁川より朝鮮京城迄	八里
仁川より支那旅順港迄	三百里
仁川より支那芝罘迄	二百七十三里
仁川より支那大連灣迄	三百九十里

仁川より支那本沽迄　四百六十三里
元山より長崎迄　四百六十里
神戸より下ノ關迄　二百四十里
馬關より長崎迄　百四十二里

○東徒の猛威と官賊の殺傷

賊徒の巣穴は從來忠清道の報恩と全羅道の東北部にありしが彼等は追々沿海地方に向ふたり數日前陷れたる靈光と云ふ古阜と云ひ泰安と云ふ皆全羅忠清二道の沿海地なり而して其れ兵營を三十四ヶ所に設く而して彼等が根據地は現在全州石城咸平靈光にして前軍は石城に據り中軍後軍は全州咸平靈光に駐まる軍令は多く靈光より出るもの丶如し又東學党に一隊の黠黠軍あり東軍の中堅たり彼の一隊は白布を以て頭を包む遠く之を見れば宛然白薔薇園の如し故に此に名あり其軍勢見る四千名余と傳ふ勇壯敢爲常に官軍を走らす東學党の勢ひ如此益々猖んなり農工商賈者は之を見て頗る喜悅の色を顯すと抑も

朝鮮に於ける官民の懸隔は文明人士の想像に及ばざる處殊に官吏は權威を以て富饒なる農工商賈の資財を徵發して自己の囊橐を富すを常とす故に農工商賈は蓄財の心に乏し否蓄の必要を感ずるも奸臣虐使の徵發を恐れて餘財を浪費する癖あり然るに東學党の起るや農工商賈は其私財を獻じて運動を助け以て閔氏の政府を顧覆し新後財産の安全を計らんと頗る今回の暴舉を喜び居れり

軍事衛生の不整備なる朝鮮國に於ては戰地の負傷者を療養するの道なく多くは漢法醫の治術に一任するす以て其の經過も頗る遲延し爲めに死亡するもの少からず道路の傳ふる處に依れば東學党の負傷は攻戰以來四五十名に過ぎざるも官軍の死傷者は五百人以上に達したり（京城通信）

（我兵京城に入る圖）

○大鳥公使の仁川着

大鳥公使幷に其一行は六月九日無事仁川に到着したるよし同日午後二時仁川發の電報同夜九時過ぎ都下の或る方へ達したりと面して同公使は直ちに京城に入るならんといふ

○我海兵京城に入る

清兵は日本兵に先ちて渡韓せしも尚ほ牙山に止まり日本海兵は隊伍整々既に京城に入れり

○出兵の通知と軍隊の派遣

朝鮮に於ける東學党の騒擾に付き天津條約に依り日本政府より出兵の事を支那政府に通知し又支那政府に於ても同じく出兵の事を日本政府へ通知ありしと云ふ

朝鮮國に於ける東學党の勢益々猖獗を極め同國政府の力能く之を鎮壓し得ざるの情況に迫りたるを以て我政府は同國に於ける本邦公使館領事館及居留の國民を保護せんがため

今回軍隊を派遣す

○陸兵仁川に上陸す

我日本帝國より朝鮮國へ派遣せし混成旅團兵は六月十二日拂曉同國仁川へ安着し直ちに上陸したりと云ふ

○軍隊の組織

我國より朝鮮國へ派遣せし陸軍々隊は第五師團兵を以て混成旅團を組織し派遣したるものなり

○混成旅團長

朝鮮國へ派遣されし混成旅團長は第九旅團長陸軍少將大島義昌氏を任せられたり

○清國艦隊の動靜

清國の海軍には北洋艦隊南洋艦隊廣東艦隊等の區別あり今其艦隊に附屬する軍艦の重なるものを左に掲ぐ

○北洋艦隊

揚威　平遠　濟遠　致遠
靖遠　超勇　經遠
鎮遠　定遠（旗艦）（以上九艦甲鉄艦）
以上九隻にして之に砲艦操江　鎮東　鎮中　鎮西　其他二三隻附屬せり

○南洋艦隊

南瑞　南琛　銳捷　保民
面して又砲艦數隻之れに附屬す　外四隻（以上巡洋艦）

○廣東艦隊

庚丁　庚乙　庚申（以上巡洋艦）
右之外砲艦數隻之れに附屬す

朝鮮の事變起るや北洋水師提督丁汝昌氏は旗艦鎮遠號に乘じ先づ揚威平遠濟遠致遠操江の五隻をして朝鮮に至らしめ而して丁提督自身は定遠外數隻を督して威海衛に止まり敢て動かざる顕りに揚威等を指揮して專ら警戒偵察せしめ居れり之れが部下たる揚威平遠操江は直ちに仁川に入りて砲擊し濟遠致遠は牙山郡山の沿海を巡航し一定の港灣に碇船し居らず又南洋廣東の兩艦隊は別に今回の變に與からず但だ庚丁庚乙庚申の三艦は曩日北洋艦隊の爲め威海衛に至りしも去て居處詳かならざれども決して朝鮮近海にはあらざりしと云ふ

○軍隊入京の盛況

仁川より京城に進軍せし我軍隊は日本帝國軍隊の大旗を翻し隊伍を整へ最も勇壯を極

めたり在留本邦人中京城外迄出迎たる者頗る多かりし我軍隊が入京するとの事を聞や韓民は屯軍旅を見んとて仁川京城間の沿道に集りしもの山の如し又我軍隊は京城に着し夫々豫定の地に屯營するや韓民の其營前に蟻集し來り我軍隊の勇壯なるを見て大に驚怖し居れり之に反して在留本邦人民は清國に先つて　海陸両軍が入京したるをば大に歡び居れり（京城電報）

○京城の地勢

京城は仁川港を距る東へ七里（日本里程）北緯三十七度三十分東經百二十七度四分に位し北に白岳山南に木覓山東に駱駝山天藏山及び拜峰山西に仁王山白蓮山及蓮華山あり又遙かに北緯の三角山を望み山脈皆相連す城廓の西方に強壁あり周圍八万九千六百十尺即ち我が四里十五町十八間二尺四寸高さ平均十尺許各門際に至りて凡そ二十尺の高に及ぶ南に崇禮門北に肅請門東に興仁門西に敦義門東北に惠化門西北に彰義門東南に光照門西南に照義門あり就中興仁門最も巨大なして其高壁門の外方を擁し敵兵の侵入を防禦する殊に嚴重なり又興仁崇禮の二門は八道に通ずる大路の咽喉なるを以て警衛常に嚴重なり各門の擁壁は切石に疊み穹窿狀を作し上に層樓を置き門扉は鉄板を以て之を包裝す市街の廣さは東西凡そ三十丁南北凡そ二十丁にして其四分の一は新舊兩大闕各官衙及王族の邸宅なり又た市中の大路は巾五十五尺（我六間半）中路は十六尺（我一間半）小路は十一尺（我一間）位なり

王城は白岳王の麓にあり景福宮と稱す四方強壁を以て圍ひ其高二十尺南に正門あり光化門と云ふ城中松林鬱蒼高閣其間に聳立す昌德宮及盧昭宮は當時共に禁闕と稱す京城の市内を五區に分ち中部八坊九十一契東部七坊四十三契南部九坊九十一契北部十二坊四十四契戸數四万六千五百六十五人口二十万二千六百三十九人なりと

（陛下の恩賜に感泣する圖）

○東學黨敗衂

全州各地に割據せし東徒官軍の攻伐する所となり四方に逃竄して一時其形跡を収む官軍聞聲を發して一先づ靈先に引き揚げたり（六月廿三日午後釜山發）

日清両兵の比較

日清両兵今將さに干戈の間に直見んとす某專門家が毎日新聞社員に語る處ありと云ふを聞くに左れ如し（六月二十六日毎日新聞拔錄）

一万の清兵は虚　曰く清國より一万の兵を派したるは虚ならん旅順威海に一万の兵なし良しありとするも我軍艦黄海近岸に往來せば支那は之れに備ふる兵員なかるべからず今二營より一万の兵を發せば後は空虚とおり加ふるに支那は極めて運送船に乏し運送船欠乏の支那にして一週日間内に朝鮮に一万の兵を發す是れ爲し能ふ所にあらず恐らくは例の虚喝ならん

艦長　艦長は支那に二三人は中々侮るべからざる者あり彼等は四五十年間の經驗を積めり然れども乘組員全体の伎倆を云はゝ彼は幾分か我れに讓る所あらん軍艦乘組員たる者は水火夫の如き者も經驗の多少によりて軍艦進航の遲速に關す我の察する所を以てするに支那の軍艦は此等の完備なからん又艦の修繕も不行届あらん二十ノット行く者は十八ノット十八ノット出るものは十五六ノットに減ずるならん彼にして南洋艦隊が完備すれば我は中々の心配なれども幸に南洋艦隊は極めて不完全なれば海上の戰も顧慮する所少かるべし

兵士の價値　我の一兵彼れの二に當ると見て不可なし支那には徵兵の制なく一種義勇兵の如き者なれば老若の兵混合せり我は然らず年齡を限り寸尺を限り躰格を精選せり加ふるに彼兵は戰爭の經驗なし長髮の乱支那兵中には差や見るべき働を爲したる者なきにあらざるも最早年數を經にれば今日戰の用を爲さず北境エリーの戰ひに出戰したるものあるも此等は野蠻人との戰かれは格別の功用なからん

士官　陸軍士官は我は彼より數等の上にあり

費用　我一兵の費用は彼の二兵に當らん我は羅紗服を服せり彼は粗服を服せり我は肉食

彼は穀食我は餞厘も朝鮮を痢はさず彼は民家に乱入して軍隊の衣食を取る事多し

○軍隊悉く京城に入る

六月二十四日京城發の電報は報し來つて云ふ仁川に到着せし日本軍隊は悉く同日を以て京城に入りたりと

○清國の運送船

清國は今回の朝鮮事件に當ても運送船に欠乏を告げ困難す夫は從來の運送船（二十四艘）も多くは江川を航行するに適當すね蒸船なるが故其噸數等甚だ少量なるを以て今回の事件に當ては運送上一層の困難を感じ居ると云

○日本兵士の健康

朝鮮國は我日本帝國とは氣候風土を異にするのみならず飲料水尤も粗惡殊に炎熱の候に際し此氣候風土を異にする國國に向て今回我軍隊を派遣されしに付ては兵士中之れが爲めに疾病に罹かるの憂ひなき乎と竊かに憂慮せし人もありしが幸ひにも疾病者甚だ少なく最初僅かに十七名の疾病者ありたるのみ此疾病者とても最も輕症なりし故歸國後直ちに全快したる位なり又同國京城に屯營する軍隊中には郊外の各要害地に散布屯營し居るものあり此等は市街と異なり樹木も多く空氣も清涼にして飲料水も清潔なるより隨て兵士に一人の疾病に罹るものなしと云、

○聖恩優渥

申すも畏れ多き事乍ら我　大元帥陛下には此度朝鮮に派遣せられたる兵士の上に就て殊おふ聖慮を煩はさせられ御物を下し賜ふべき旨（七月二日）仰出されければ陸軍省にては仰畏み奉り即日派遣旅團長へ宛て上將校より下兵卒に至るまで精酒並に卷烟草若干宛配與の儀を通達したりと聖恩優渥在韓の兵士一層感つて事に從ふおるべし

因に記す宮内省より銀盧の岩谷商會へ一寸紙卷貳二十五本及壹十万箱を製造納品すべ

き旨を達せられたり其包紙の上には「島給」の二字を標記する由又陸軍省よりも同店へ十本入百三十万包の注文をおしたるよし

○天恩の厚きに感泣す

畏くも我が大元帥陛下には去る二日を以て朝鮮國に派遣されたる海陸兩軍兵に恩賜物を下し給はりしに付伊東海軍中將大島陸軍少將より有栖川參謀總長宮殿下へ左の如き御禮の電報ありたり

七月二日午后四時京城發
仝四日午后一時廿分到着

酒莫下賜の恩命を辱ふし部下一同皇恩の厚きに感泣し遙かに兩陛下の萬歳を祝し伊禮申上げ奉る

有栖川參謀總長宮殿下

在京城　陸軍少將　大島義昌

兩陛下より優渥なる御恩賜謹んで拜受仕る御執奏然るべく願ふ

七月三日着電

海軍司令長官
海軍中將　伊東祐亨

有栖川參謀長宮殿下

○聖恩無比

在韓兵衛生上の景況は衛生報告にて詳かにする處なれども石黒軍醫總監は尚其實況を知んとて曩さに韓地より廣島に歸り來れる病兵に就き三十余の問を發し一々是れに答へしめて報告の參照とせしが參謀總書有栖川宮殿下何時か此事を聞し召れ

（大鳥公使談判の圖）

ゝは定めて參考とするべき事多からんとて右問答書を差出すべき旨命せられぬ國王答議總監は殿下の御手許まで之を差出し置かれしに後殿下は總監を召されて仰せらる樣先日參内して種々奏上せし事ありし序に此事をも殿聞に達したりしに陛下には其の事を聞し召され右答書を此の儘さし出すべしと仰出されし故御手許へ差上置きしに二日間留め置かせられ本日陛下に相成りたり爾後も此の如きものは折々御内覽に供すべきに付差出すべし云々と茲に於て總監は陛下が軍人を愛重し玉ふは今に始めぬ事ながら兵卒の飢食坐臥に至るまで大御心に懸けさせ玉ひ韓地に在りて如何に苦勞するかを知ろし召し給はんとの慈仁なる聖慮の程に感激し欷歔泣涕一言をも發する能はずして殿下の御前を退きしとか聖恩の洪大無比なる遙か洩れ承りては誰れか感泣せざらんや

○朝鮮屬邦問題

在韓の我が大鳥公使は六月廿六日宮城に參内し朝鮮國王に謁見し具さに出兵の理由を奏上し進んで

貴國は清國の屬邦たることを默認するや否やゝに於ては万國に率先して貴國の日を期して確答を得たし若し又屬邦たるを默認せらるゝ獨立を承認せし我が日本は已むを得ず貴國に對して斷然たる處置を施さゞるを得ずと陳し退出せしに同月三十日に至り外務督辨趙秉稷氏は

我朝鮮國は純然たる獨立國にして決して清國の屬邦に非ざる旨を大鳥公使に回答せり

と

○清公使償金を請求を

朝鮮政府は我が大鳥公使に其國の獨立を回答すると同時に清國政府に向つて朝鮮國が純然たる獨立國にして決して貴國の屬邦にあらずと通告したりしに袁公使は北京政府の意を承け朝鮮政府に向つて

若し貴國にして我が清國の屬邦に非らずとせば貴國の要請に應ずて出兵したる一切の費金を辨償せられたしと申込みたりと

○大鳥公使と袁世凱

袁世凱が我が大鳥公使に向ふ撤兵の請求を爲せし事は是まで數回の多きに及びしも大鳥公使は何時も其談判を峻拒し斷固として動かざりし事は既に報道せし處なるが其の最後の談判には袁氏と大鳥公使の間端あく激論を生ず此時大鳥公使には儼然座を正し大喝一聲談判の無用を叱咤せしに流石の袁氏も其猛威に辟易し戰慄して席を辞せし後は撤兵の請求をなし得ずと云ふ

○福島中佐

朝鮮國に出張中おりし福島中佐は去る二日仁川を發して急に歸朝の途に上り九日朝（七月）七時二十分新橋着滊車にて歸京し夫れより直ちに參謀本部に赴きたる由なるが中佐の歸朝は何か緊要の要務を齎し來りたるおらんか而して後再び發程す

○本野參事官

大鳥公使に伴隨して朝鮮に出張せし外務省參事官本野一郎氏には福島中佐と共に歸京したりしが再び韓國に向て出發す

○朝鮮政府大鳥公使の要請を容る

十一日（七月）左の意味の電報は京城より其筋に到達すと

朝鮮政府は我が大鳥公使の意見を容れ內政整理の調査委員を設くる事に決し已に其任命ありたり

○朝鮮の兵士

（福島中佐上陸の圖）

戶籍法の設なき朝鮮國の事なれば國內の壯丁を徵るに一定の法規もおし統營兵若くは壯

營兵の如き名こうわれ其實半農半兵の被傭者に過ぎず去れば一軍隊の中に十八九歳の少年あるかと見れば五十歳以上の老人あり上下共に兵士を賤しむの風習あり苟も衣食の資あるものは兵士たるを恥ぢ日本の大兵を見て最初は無禮にも日本人斯まで多數の貧民ありやと質問するものさへあり殊に驚くべきは京城第一の國道の中央に三々伍々團坐して公然賭博なすも人見て之れを怪まず又王宮の門前を護る親兵にして白鷺鼻歌を歌ふ者あり左手に貧乏德利を提げ右に饅飩を盛りたる笊を持ち醉歩蹌踉として通行する兵士あり午前は軍服を着けて王宮にあるかと見れば午後は平服に着替へて賤業に從事するあり又今回の事變發生以來日々何處へか身を潜むる兵士尠からず過般陸軍大將李鎭健は手兵數十名を率ひて沈鮮澤の邸宅に赴かんとして日本居留地に來り我兵の哨兵線内を通行せんとするや我兵は一應其通行を遮斷せる時偶々十一二の小兒あり銃劍を帶せる韓兵の鬚を引張りしも渠等平然として知らざるもの丶如く只笑ひ居たり其無氣力なる事大凡斯の如しと雖婦女に向つては猶儼然として語つて曰く一旦事あり外兵我國内に來るあらば我〻劍を揮ふて渠輩を塵殺する事易々たるのみ

○韓廷の内政釐整策

朝鮮政府大鳥公使の建議を容るゝや茲に一局を新設す名を釐政局と云ふ一局三員中正熙ソウインセウ金宗漢新任せらる國王より發したる諭旨に基き整釐に着手せり諭旨の要は左の如し

綱紀を立て賞罰を信にし財政を整へ人材を擧げて而して文武官財務官の會議を開き之を實行せよ

○我提議を承諾す

朝鮮政府は我政府が提出せし内政改革の大躰の要項を承諾したる旨十七日(七月)大鳥公使まで確答ありたりと(十七日京城發電報)

○韓廷の議一變

我政府の提議を容れ内政改革に着々歩を進め來りし朝鮮政府は廷議漸く一變す(七月十

（九月京城發電）

日本の提議に係る內政改革案は朝鮮政府の喜んで同意を表する處なりと雖今日の如く斯く大兵駐屯せしめられては國民自ら疑懼の念を生じ人心恟々朝鮮國の治安を害するの虞なしとせず依て先づ日本兵の撤回を望む且つ內政改革案の如きも日本の提議に從ふ時は各國陸續兵を派し要求するに至るべく朝鮮政府甚だ其處分に苦しむ故に日本兵の撤去と共に日本の提議に係る改革案をも亦撤回せられたし然る時は朝鮮政府は任意に改革を行ふべしと

公文を以て朝鮮政府より大鳥公使に申し出でたり

○最後の談判

大鳥公使は朝鮮政府に對し二個條の要求をなし三日間を期して決答を得んと最後の談判を試みたり茲に於てや韓山の風雲益々急なり

七月二十三日午前八時京城發
仝　午後一時四十分着

○我兵韓兵と戰ふ

王城附近に居りし韓兵に挑まれたるに依り之れに應じ小戰中

同午前八時廿分發
午後一時四十分着

韓兵遁走し兵器を取上げ且つ王城を守備す

右は其筋へ到達せし急電なるが尙ほ聞く處に依れば今回の衝突たる韓兵が無禮にも我兵に向て發砲せしが抑も破裂の根本にして夫れより我兵は之れに應じ戰ふ事大凡二十分位なりしが韓兵支へ難くして遁走せしかば我兵は進んで王城に至り守備せり此時我兵は韓兵の銃砲數十挺を取上げたりと云ふ

（京城の合戰日兵の勝利）

○大鳥公使の參內

大鳥公使が三日間を限りて嚴談せし要件に就ては朝鮮政府は極めて無禮なる文辭を以て拒絶したり是に於てか我が大鳥公使は大に憤激し韓廷の官吏抔を相手に談判するも到底徒爾たるを察し王宮に參內し親しく國王に奏する處あらんと廿三日朝宮中に赴く用意をなせりと

○大院君起つ

是れより先き國王は時事の日に非なるを憂慮し使を大院君の許に遣され陰に其內意を傳へしめられしに閔族は逸早くも之れを聞き付け大院君にして若し參內せんか途中に於て之を要せんとの事大院君の聞知する處となりしかば大院君も少しく躊躇し召に應せざりしを以て國王は已むを得ず大院君入城の際日本兵を以て護衛せん事を我が大鳥公使に許さで予越さる

是に於てか大鳥公使は其兵を以て大院君を護衛し二十三日午前八時王宮に入らんとせしに突然韓兵の砲擊に逢ひたるものなりと然れども前記電報する如く接戰二十分にして韓兵敗衂せしかば大院君及び大鳥公使は無事入城し國王に謁見したり然るに國王には我が大鳥公使從來の要求に對し厚く好意を謝し毫も拒絶の意なかりしを示し直ちに大院君に政務を任せられしに大院君も其任命を拜受し當分は宮中に滯留し居る事に決せり又た我が大鳥公使及び我が兵は共に無事なりと云ふ

○朝鮮國政改革委員

校正廳總裁官

領議政　沈舜澤　領府事　申應朝　判府事　全宏集

領敦寧　金炳始　左議政　趙秉世　右議政　鄭範朝

校正廳堂上

中樞府事　金永壽　戶曹判書　朴定陽

兵曹判官　閔泳奎　漢城府判尹　申正熙

行大議軍　李祐永　仝　金晩植　吏曹判書　尹用求
大議軍　趙鍾弼　内務協弁　沈相薫
禮曹參判　朴容大　開城留主　李容植
右　尹　熙允中　内務協弁　金宗漢
内務協弁　寅　曹　承　内務協弁　金思轍
　　祐正郎廳
金　鈺　　鄭　寅　杓

○日清海戰

（我軍大勝利）

七月二十五日午前七時朝鮮海豊島近傍に於て我軍艦に對し清國軍艦より砲撃したるを以て我軍艦より之に應戰したる末敵艦操江號を捕獲し清兵千百余人を乗り込ませ武器を積載したる運送船一艘撃ち沈めたり廣乙號は東海岸に近き淺瀬に逃走し清遼號は直隷海灣に向ひ逃走せり此戰ひや我軍艦吉野浪速秋津州の三艦仁川に向ひ航行中おりしが我軍艦

（日清海戰　花波龍宋　一百號　朝日新聞）
（吉野　大和　浪速　秋津洲　大和）

の一には將旗を掲げたるに彼れは出會して也相當の禮式を爲さゝるのみならず戰鬪の準備を爲し我れに向て敵意を示し發砲を始めたるなり我三艦も直ちに之に應ぜて砲戰し互に烈しく砲擊せる事凡そ一時二十分にして操江を捕獲せしは秋津州濟遠を追ひしは吉野運送船を擊沈めしは浪速なり而して此日の戰ひ我船は一人の負傷者なく艦体又異狀なし敵の二艦は一大破壞に及び運送船には支那陸軍將官二、大隊長四中隊長十六兵員千百野戰砲十門を載せたり操江の乘組は艦長王永發以下八十二名なりと云ふ因に記す操江は運送船を護衛し太沽より牙山に向ひ濟遠廣乙は之れを迎へん爲め牙山港を出で航進せしものなりと

○豐島の地勢

豐島は仁川と牙山との間なる小阜島の南微西凡そ七哩半の海上に在る一島にして清國芝罘旅順港等より牙山に至る航路に當り仁川濟物浦の錨地を距る凡そ二十六哩强にして近傍水深く岩礁少く幅員も頗る廣大にして島民も亦多しと

○陸戰大勝利

八月三日午前九時四十分釜山發
仝日午前十一時四十分着

二十九日朝三時開戰激戰五時間の後我軍全勝を得て悉く成歡驛の敵壘を拔きたり支那兵二千八百余人にして死傷五百余人我軍の死傷將校五下士卒約七十名敵は狼狽全く分散して洪州の方向に潰走せり

分捕軍旗數旒大砲四門其他山の如し猶追擊して牙山の根據を奪へり

於七原　大島少將

七月三十一日

○成歡の地勢

我が帝國陸軍が大勝利を以て清兵を擊破したる朝鮮成歡の地形たる韓地に在る清兵の本營とする牙山を距る事四里余の東南に當る一小邑にして京城より進む我が軍隊を防禦するに最も要害に地にして清國軍は此の地に砲壘胸壁を築き二千有余の兵を以て固守し居

しものにて清兵の爲めには死力を尽し固守せざる可からざる地なりと

○小村臨時代理公使の引揚

八月一日午後二時廿五分北京發

小村臨時代理公使は直ちに北京を出發し米國公使館は帝國公使館記錄の保管及帝國臣民保護の事を引受けたりと

平壤激戰我軍大勝利

廿七年九月十日清兵の先鋒は黃洲の守を棄てゝ平壤に潰走す我陸軍は江東及黃洲の二道より平壤を攻擊し數時間の後清兵潰散捕虜數十名死傷算なしとは釜山發電にて傳ふる處なるが電文簡端にて詳細を知るに由なしと雖我陸軍は愈々猛進北行大攻擊を試みつゝあるや明なり斯くの如く喧傳する事頻りなれども未だ確報を得ざるを以て日夜鶴首して事實明白の快報に接せん事を希望し至りしに十四日に至り始めて是れを確むる事を得たり曰く我軍の先鋒は既に中和、三登、成川の各地に達し清軍の前營と衝突し戰鬪を始めたり又た黃洲の一方より進みたる一隊は去る十一日鐵島の上流より大同江を渉り北岸に沿ひ沿岸の砲壘を擊破しつゝ平壤に向て進軍し元山方面の兵と東西相應ぜて進擊を試と日軍の大進擊を試みつゝあるや既に明々白々たり而して中和は鳳山平壤間の一驛にして義州路に當り三登は元山方面より陽德を經て平壤に出づる中間に在る一驛なり又成川は三登より北の方十余里の處に在り共に元山方面の通路中樞要の處なり

黃洲に向ひたる我が一軍隊は十一日鐵島の上流を渡江し十二日余隊悉く渡江し終り直ちに平壤方向を指して進軍せり而して此一隊には野津中將も加はり居り同隊の殿をなし居れるより鐵島の上流より平壤に至るまでの里程僅かに二十哩に過ぎざれば平壤攻擊硝烟天を焦し砲丸雨と降して平壤と陷落勇しき兵士の勳功近きに報じ來り同胞の躍躍期して待つべし然りと雖世人動もすれば僅々數時間にして陷落せん抔傳ふれども平壤は古來有名なる要害の地短時間にて拔くべくもあらずと雖も我軍隊の武勇なる大勝利の快報近きにあらんと思ひしに果せる哉我軍が十五日を以て平壤總攻擊に取掛り激戰の後ち愉

快にも平壤を略取せりとの快電戰地に於ける野津中將より十六日午前八時發電せり電文に曰く昨日來(十五日)師團は平壤を圍み激戰の後大勝利今朝(十六日)未明全く平壤を略取す敵死傷極めて多し我軍將校以下死傷三百名なり委細跡よりと嗚呼壯快なる哉絶快なる哉此大勝利よ斯る目出度勝戰を耳にし歡天喜地國民の祝意を表して萬歲を唱ふるの際又々野津中將よりの勝報に接せり

我師團は糧食運輸の大困難に拘らず各道より平壤に向け前進し昨日を以て均しく城の四面を圍み激烈なる戰鬪の後大勝利を得今朝未明を以て全く是れを略取せり敵の大將左賓貴以下死傷生擒其他兵器米穀の我手に落ちしもの極めて多數なり敵の兵力は二萬と稱せしが昨日來一二群を爲して我が哨兵線を逃れ去りしのみにて他は概ね死傷及び擒となれり我軍死傷將校以下大約三百名

此大勝利を得しは我

天皇陛下の威稜と將校以下の忠勤にあらずんは茲に至らず

十六日平壤　野津師團長

但敵の大將左賓貴は奉天府及牛莊附近に屯在せし奉軍の統領なり

十六日午前九時柴田第一野戰病院長の發電に曰く昨日平壤攻擊の際來院せし負傷者將校十一名下士以下二百六十名即死少し入院後死亡せし者二名なりと又廣島發の急電(十七日午前二時十五分發)に曰平壤激戰の時敵兵はテッサン附近に放火し火煙天に漲る統領左賓貴以下俘虜無數兵器彈藥糧食悉く分捕其他の敵兵我哨兵線を侵して逃亡したりと實に平壤は北方の要地清軍依つて以て堅守し死力を盡して戰備せしなるも今や斯く容易に我軍の略取する處となる北京城頭日章旗風に飜り武威を宇内に輝さん事瞬間にあらん然りと雖攻擊軍の日本兵如何に忠勇の精神を勵まし苦戰夜を徹するも屈せずして平壤を陷落せしか頁を追ふて幸に是れを知れ

平壤陷落

攻圍の軍略既に決し十五日より十六日(かけ物の見事に我軍の大捷利となりたる平壤の

激戰讀者諸君其大略を得知せり元來清兵は恰かも烏合の群に等しく殊に食糧の欠乏を訴へ粥食に腹を充たすの有樣なる上軍中一の總督なく寄合の勢に寄合の將校を以て軍令一致せず部下向ふ所を異にす我精英なる軍に遇ふて何ぞ勝算の理あらんや我進擊の籌策一度決定せし以上は例令ば一線を畫すが如く規矩を以て物を測るが如く其目的の結果と相應せざる事なきや必せり即ち部署如何にと云ふに

本軍　野津中將
右軍　立見少將
左軍　大島少將
別働軍　大迫少將

本軍は中和（黃洲より東北四五里の所）より北發し左軍は黃洲より北進し鐵島近傍より大同江を渡り江の北岸以西より北進したり左軍は蒯寧より進擊し元山の別働隊は監水の險を越えて直西し一分は平壤北部順川より南行し他の一部は平城の西部順安安定より進擊したるなりと籌策斯の如くなるも敵軍は我に元山の別働隊のある事を知らぬ何時にでも北方定洲に向ふて逃走するを得る者と思ひしなるべきに我軍平壤の四方より攻擊したれば彼等は途方に迷ひ皆城中に逃げ込み生擒死傷實に夥しきに至れるより即ち俘虜死傷に屬する者一万五千人なりと云ふ

平壤陷落の詳報

佐藤大佐の元山枝隊歩兵第十八聯隊騎兵一小隊砲兵一大隊工兵一大隊（一中隊欠く）衛生隊は成川より立見少將の蒯寧枝隊歩兵第十二聯隊の一大隊第廿一聯隊の一大隊騎兵一分隊は麥田店より大島少將の混成旅團の歩兵第十一聯隊（一大隊欠く）歩兵第廿一聯隊（一大隊欠く）騎兵一中隊砲兵一大隊工兵第一中隊衛生隊半部野戰病院一個はコシウ（黃洲なら）街道より本部は歩兵第十二聯隊（一大隊欠く）歩兵第廿一聯隊（歩兵第廿二聯隊から）（一大隊欠く）騎兵一中隊砲兵三中隊工兵一中隊衛生隊半部は大同江を渡り右岸に沿ひ共に平壤に向ひ十五日四面より同府を包圍攻擊す大島少將の報に依れば敵の大部分は平壤府内と其左右のみ此隊は幕營し（平壤府内と其左右は幕營せるの意ならん其小部

分は左岸船橋里大同江には架橋を爲したり攻撃の結果に依れば敵の砲は二十門以内に過ぎざれども土人の言によれば敵は凡ろ四万人なりといふ我本隊は渡河の爲め少しく後れ十五日の攻撃に於て敵の馬兵六百余人を斃したり然れども此日の攻撃の結果は充分ならず依て十六日拂曉より再び攻撃を始めしが大島旅團は其將校即死六名負傷十二三名下士以下死傷二百以上に及びたると彈藥の欠亡とにより已むを得ず攻撃を中止せしも各面の戰況漸次有利の戰況を呈し午前八時頃遂に全く平壤を略取し敵の大將左寶貴以下死傷生擒其他兵器糧食我手に落ちしもの極めて多數なりと高陽郡山縣大將よりの發電に見えたり

因に記す分捕品中金銀塊を滿したる目方三十五貫目余の箱四十個韓錢六百七千貫あり即ち價格の概算は金塊六十三万圓銀塊十九万圓餘韓錢十三万圓餘合計九十五万五千二十圓餘なりと云ふ

海洋島海戰の絶大捷利

豐島の海戰に清兵の倨慢を挫き牙山の役に清兵の肝膽を冷さしめ平壤の激戰にて清兵を遁より外知らざらしめ旭日章旗を一度臨めば戰はざるに全軍四方に潰散して恰も我は猛虎の怒りし如く彼は病羊の如し連戰連勝破竹の勢鋒鋭當る者なきに際し茲にまた海戰の最絶大捷報を耳にせり處は海洋島附近にて清國艦隊に出會し激鬪の末我艦体の一大捷利を博せり而も敵の十四艦と水雷艇六艘に對するに我軍艦十一艘を以てし敵は我に勝るの東洋一等なる定遠の如き戰鬪甲鉄艦を以てすとも縱横奮擊して終に敵艦四艘を擊ち沈め同三艦を燒失せしめたり實に沈沒燒失の爲めに失ふたる其總噸數は二万四百三十噸乘組員千三百三十七人ありとは

海戰の詳況

島村海軍大尉の報告に依れば本月十七日午后一時より同五時迄盛京大孤山沖に於て我軍艦十一艘と清國軍艦十四艘と水雷艇六艘との間に於て激烈なる海戰あり清艦揚威超勇來遠靖遠は擊沈められ定遠經遠平遠は燒かれ殘餘の清艦は盡く大破損を受け西方に向け逃

去りたり我方にては松島比叡赤城は多小の損害あり將校以下死傷ありたりと大鳥公使より報じ來りしが又廿一日(九月)海軍省に達せし伊東聯合艦隊司令長官よりの電報によれば陸軍を護送して十二日仁川港沖に達し十四日第二遊擊軍と八重山とを仁川港に留め其他の諸艦を率ゐて發し十五日大同港に達し第三遊擊軍と水雷艇盤城、天城を鉄島まで進めて陸軍の應援をなさしめ十六日本隊と第一遊擊軍赤城、西京丸都合十二艘を率ゐて(編者曰く西京丸は御用船なり)大同港を發し十七日朝海洋島を經て盛京省大孤山港沖に至りしに敵艦隊十四艘と水雷艇六艘とに出逢ひ午後零時四十五分より午後五時過まで激烈戰をなし終に來遠、揚威、超勇の三隻靖遠又は致遠の内一隻都合四隻を破壞沈沒せしめ其他は大損害を與へたるもの多し現に定遠經遠の如きも火災起り頗る混雜の態あるを見たり其内日沒に近き敵艦隊は威海衛の方向に遁け去るの狀ありたるが故に我艦隊も之れを遮ぎる爲め凡ろ之れと並行の航路を取りて進みしも夜中敵の水雷艇に備ふる爲め餘程の里程を離れて進みしが故に敵の所在を見失へり然れども翌朝天明に至らざ必らず是れを見出し得るならんと期して廟島の方向に進みしに天明に至るも敵の一隻をも見出さず故に敵は或は元の地に引返したるやも計らはずと思考し昨日の戰地に引返したるに遙かに二三隻の煙りを認めしも何れにか遁げ去りて其所在を失ひたり依て前日火災の爲め淺瀬に乘揚げ見捨てありし揚威を破壞し一ト先づ當地に歸りたり西京丸は軍令部長乘組屢々危險に陷りしも幸に無事にて本隊より先きに當地に歸りたり此役我艦隊には沈沒せしものなくし但多少の損害を受けたるは勿論なり其内松島最も甚しきも職務には少しも故障なし我艦隊死傷者を舉ぐれば戰死者將校十名下士卒六十九名負傷者艦体を通じて將校下士卒合せて百六十名内松島赤城比叡最も多し此役比叡赤城最も苦戰せり讀者諸君よ此公報を一讀せば如何に我艦隊の勇壯なりしか如何に戰鬪の激烈なりしか想ひ來り想ひ去り轉た感慨の情に堪へざるべし

名譽ある軍艦と海戰死者

太孤山沖にて清艦と快戰を試み永く世界の海戰史に名譽を傳ふる我軍艦は嚴島、松島、橋立、吉野、扶桑、浪速、高千穗、千代田、秋津洲、比叡、赤城の十一艘と外に傳用船西京丸の通合十二艘なり而して此役名譽ある戰死を遂げしは將校赤城艦長始めとし以下

十名なり即ち

赤城艦長　坂元八郎太　　橋立分隊長　高橋義篤
松嶋分隊長　志摩直清　　松島分隊士　伊東滿嘉記
橋立砲術長　瀬之口覺四郎　　秋津洲分隊　永田廉平
吉野分隊士　淺尾重行　　比叡軍醫長　三宅貞造
比叡乘組　村越千代吉　　比叡主計長　石塚鑄太

嗚呼軍人の敵陣に臨むや死力を尽して之れと戰ひ或は微傷を負ふ者あり重傷を負ふもの あり或は命を敵丸に落すものありと雖各分を守り國家の爲め君主の爲め赤忠を尽して海上の鬼となり原頭の露と消ゆるとも絶大の芳名は千載に傳ふて赫灼たらん

◎西京丸乘込樺山中將の奮戰

大孤山沖の海戰にて我西京丸が一運送船の身を以て精鋭なる北洋艦隊の間に立ち奮戰激鬪辛ふして其難を免れたるは稀有の働きなり今乘組員の談話なりと云ふを聞くに曰く

去る十七日（九月）午前八時頃西京丸は鴨綠江沖なる海洋島の北西端を距る北方三里の處にて針路を東北に進め八時三十五分頃北東二分の一東に變ずて進む同九時四十分赤城艦海洋島附近に敵のあらざるを報ず。同十時頃に至り大鹿島を我左舷船首に見る然るに同十一時二十分に至り東北島に當り煙り見ゆるとの信號ありたれば敵艦の或は來航すべきかを思はしめたり同四十分頃敵の水雷艇及び艦隊見ゆとの信號あり次いで本艦及び赤城に向ひ左側に遣れとの信號あり戰場は大約北緯三十九度三十三分東經二十三度四十分の處に在り零時二十分頃旗艦より避けよとの信號ありたるを以て西京丸は敵に對せざる方向の左側に位置を占む戰爭の將さに始らんとする前我軍敵を見出すが否や我艦隊は敵

をして遁逃する能はざらしむるが爲め先づ敵艦の遁路威海衛に去る海路)を塞がんとして彼をして歸る能はざらしめたり故に敵の艦隊も已むを得ず決戰を取り我に進み來らんとせり

零時二十三分我艦隊より第一遊擊隊に對し右翼なる敵を迎へ擊てとの信號ありたり又四十五分敵艦は我艦に對して發砲したり同四十八分旗艦より適當の距離に來れば發砲を始めよとの信號ありたるを以て我も亦彼に對して發砲す一時七分三千メートルの距離に於て我より砲擊す始め我第一遊擊隊本隊及西京丸は敵の右へ右へと進み列を亂さずして進み行く是れ我戰鬪の始めなり此時西京丸は列の最後に從ひ行けり我諸艦は發砲しつゝ進行したりしが第一遊擊隊は已に敵隊を通過せしを以て西京丸は進路を右舷に變ず此時濟艦超勇我砲彈の爲め火災起れり赤城比叡は彼れに定遠致遠來遠の爲めに逐はれんとす(是は敵艦列を亂し止むを得ずして逐ひ來りしなり)故に第一軍は更に左に廻り我本隊は右に廻はり敵の艦隊を挾擊せんとす一時十四分敵の三十珊半の砲丸我機關室を貫けり是より先き西京丸の左舷船首の方より右舷の後半部の處に在る端艇等を傷け天幕を破りて砲彈來れり十五珊の砲彈あらん此彈片は甲板後部の處に至り風取及びダスホイールとナクル舵機の頭を傷け負傷者三名あり(此外戰鬪中十二名負傷す)

一時二十七分第一遊擊隊は敵艦及び水雷を逐ふて針路を左方に轉ず此時我艦隊より第一遊擊隊來れとの信號ありたるを以て第一遊擊隊は本隊の側面に入る西京丸は遊擊隊と本隊との間に挾れたり

此時定遠或は致遠が西京丸の後より來り廣丙前より來りたり西京丸危險なりしを以て全速力にて退き第一遊擊隊の後少しく左舷の方に後進したり一時四十五分比叡は敵彈の爲め火災起り南方に避く赤城亦其後に從ふ敵艦三隻又之れを追擊したり依て本隊より比叡赤城危險の信號をなしたり西京丸は第一遊擊隊の背後に在り遊擊隊右舷に廻轉せんが爲め我的正に當り二時廿二分定遠より發したる三十珊半の砲彈躍りて士官室の後より侵入し舵機に通ずる蒸氣管を碎きたり西京丸が受たる

砲彈は之を以て最大おりとす依て西京丸は我艦故障ありとの信號をなし秋津洲浪速の間を通りて敵側に出づ此時敵艦より猛烈なる射擊を受く西京丸はリーピック、テークルを用ゐしも舵を取る意の如くあざらるを以て速力を減じ更にハンドモイールを用務し全速力を以て進む此時敵艦揚威火災を起し大鹿島附近に在るを認めたり這は膠着せし者ならん二時五十五分平遠廣丙と一の巡航水雷艇を右舷船首三千メートルの處に認む我頻りに水雷艇に向ひ發砲す水雷艇は舵機を轉じて陸の方に向へは三時西京丸は平遠廣乙と五百メートルの巨離に於て相砲擊せり三時十分一の水雷艇我西京丸船首より顯はれ西京丸に向ひて行進し正面の處にて船首發射管より水雷を發せしも中らず左舷船首五十メートルの處にて又一水雷を發せしも中らず此水雷は我船最も巧みに避けたるものにして前回の分は我左舷を前の方より横を水中に貫ぬきたるも我速力の爲め遙に側方に至りて發したり又後の分は我右舷に沿ふて通過したり是又遙に發邊に於て發したりと是は彼の水雷艇我前を通過したるに依て左右に別れしと云ふ三時三十分針路を南方に定む是より西京丸は戰鬪列外に出たり我西京丸は敵の堅艦平遠廣丙と激烈なる戰鬪を爲したるものと知らる西京丸は此戰鬪に就て多くの砲彈を受く是等の砲彈の爲に前の帆檣にも少しの傷を受け又通常上等室なる船の後部中段にも傷を受け居れり此上等室に於る發彈の爲めに火災起りしも消止めたり之が爲め被服等を燒きたり敵彈三十珊半十五珊及小銃數彈を受け比例上多く我艦を傷けしにも拘らず負傷者の僅少なりしは號令操縱の宜しきを得たるものなり樺山命令部長は將校と共に始終號令台に上りて敵艦を見下し彈丸雨注面を向くべからざる中に立ちて號令を爲し勇猛日頃に百倍し敵の堅艦と戰ひて遂に全局の勝利を奏したり

又西京丸の報告する處あれば左に掲げん然れども奮戰の詳報と多少の重復を免かれず(讀者其心して閲讀あらん事を)

九月十六日午後五時吾先鋒隊及び本隊幷に赤城及本艦と共に假泊地故錨海洋島に向ふ

十七日午前八時海洋島を過ぎ針路を北東に變じ大鹿島に向ふ
午前十時大鹿島を左舷艦首に認む
同十一時二十分吾先鋒隊より「東北東に當り煙見ゆ」との信號あり
同十一時四十分「敵の水雷艇及び艦隊見ゆ」の信號あり(但し艦隊十艘砲艦二艘水雷艇五艘)
零時十分旗艦に倣ひ檣頭に軍艦旗を掲揚し戰鬪の準備をなす
零時二十分旗艦松島より本艦に對し「避けよ」の信號あり依て我艦本隊の敵に對する裏面に、位置を取りて進航す
零時五十分敵艦隊我先鋒隊に向て砲擊を始む我艦体亦た是に應戰す午后一時五分頃に至り彼我艦隊互に砲發最盛なるを見る
同一時九分より本艦打方を始む其距離大凡三千米突内外なりし
同一時十四分敵彈本艦の上甲板士官室を貫徹し本艦の左舷二十米突内外の位置に落下す但し此敵彈は定遠若くは鎮遠より放發せるものから而して我士官室並に其附近上甲板及諸室大なる破損を生ず同一時廿七分敵艦一艘沈没せんとするを見る
同一時四十四分吾先鋒隊は速力を大にして比叡赤城の救援に赴くを見る
同一時五十五分比叡「我れ火災の」信號を揚げ南方に向て走る此時赤城亦た其針路を比叡の左側に採りて走しる敵艦三艘比叡を追擊せしも暫くにして針路を轉じ赤城に向ひ追擊すること三十分餘後ち更らに針路を變ずて彼の本隊に會す
同二時二十二分定遠鎮遠他一艘我を追擊し其三十珊半彈我左舷側を貫き「サルトン」と機械室の間に於て爆發し之が爲め同室及其の近隣數室「スカイライト」及「ハッチ」并に「パロメーター」「コロノメーター」測量類食器類等を擊破し最上甲板を貫き航機に通ずる蒸氣管を碎き爲めに蒸氣航機其用をなさず依て直ちに「我艦故障あり」の信號を爲し當艦隊に離別し豫備舵索を用しも操舵意の如くならざるを以て速力を減じ「ハンドホイル」を用意し更に全速力を以て前進すこの時大鹿島近傍に敵艦一艘を認む黄

煙を起し進退自由ならざるものゝ如く我其發射巨離に近きしも發砲せゞ蓋し火災起りしものならん同時敵艦隊右舷大凡二千米突の位置より本艦を砲擊す敵彈一個左舷後部水線際を打擊し爲めに裂目を生し海水少しく侵入す但其力能く側鈑を貫徹するに足らざりしものならん依て木栓を以て一時防水をなし後ち側鈑の内面に當板を設け「セメント」を以て充塞す

同二時四十分敵の砲艦二艘(一艘は平遠一艘は廣丙おらん)幷に一の巡航水雷艇前方より來襲するに遇ふ我れ先づ同艇を劇しく砲擊せしに命中せしが彼れ倉皇狼狽の余激戰の方向に艇首を轉じ彼我艦隊砲煙の中に其体を失す干時砲艦二艘已に本艦五百米突内外の巨離を通過せしを以て我れ全力を尽くして之を砲擊し命中せしもの二發を認む

同二時五十五分更に我艦首に水雷艇一艘を認む我前進するに從ひ彼れ亦た我艦首に眞向に進み來り同三時五分其艦首發射管より水雷を發射せしも少しく我左舷を通過す同三時六分該艇我左舷艦首大凡四十米突の位置に於て旋回發射管より水雷を發射せしも我艦底下を通過せしを以て其効を奏せざりしは我が幸なりとす

同三時敵艦一艘火災起り其火艦橋に及び進退自由ならゞ將さに沈沒せんとするを右舷正横に見る

同三時三十分我が進路を南方に定む此時敵の水雷艇三艘北方より我を追躡する事殆んど半時容易に發射巨離内に近迫する能はざるを知り艇首を返す

同三時五十分赤城の戰地に向て航行するに遇ふ

同四時二十分先きに火災れ爲め列を離れたる比叡の戰地に向ふに遇ふ依て「損所如何」と信號を爲せしに「火災消ゆ」の信號を以て我に答ふ我亦假泊地に向ふの信號を爲し針路を定め十八日午前一時十五分投錨せり

◎山田大尉の戰況實話

十月三日午後一時より山田大尉は平壤略取の顛末を參謀本部に於て演說したる大要を聞くに左の如し

騎兵の敗北

山田大尉が平壤攻擊の師團本部に到着したるは十五日(九月)午前七時十五分にして大尉は直ちに野津師團長に來着の旨を報じたる後師團長と共に師團本部の前なる某山上に登りたり同山は義州路の方に在る平壤の軍門を望見するに最も便利なる處なれば師團長は直ちに兩眼鏡を以て義州門を望見したるに遙に敵の騎兵六七十騎我軍隊の方位に向て進擊するの模樣あるより各隊に傳令して戰鬪準備を爲さしめ居る中敵の騎兵は頻りに我軍に向て發銃しつゝ進み來り我軍も亦之れに應戰し敵兵の過半を斃したり敵は之を見て直ちに左方に向て退却したるに恰も好し茲に我騎兵一中隊戰鬪の準備を爲しつゝありたれば拔刀を以て大喊喊敵中に奮進し僅かに六名を除くの外悉く之を斃したり暫くして敵の騎兵殆んど二百六七十騎前敗に懲りず再び來襲の模樣あるを以て我軍は充分戰鬪準備をなし敵の近くを待ち一齊に之を發銃し悉く之を斃したり此二百六七十騎の騎兵は所謂滿州騎兵として前進の騎兵の續々我銃丸に貫かれて斃るゝをものともせず死したる人馬を踏越へて發銃しつゝ前進し來り遂に二百六七十騎生歸せしものは一人もなかりしは敵ながら其勇悍なるには驚けり予は後とにて此斃れたる馬匹を點檢したるに其數二百七十六頭ありし

白布をのべたるが如し

第二回目來襲したる騎兵は何れも白馬にして其數二百六七十頭倒れたる有樣は恰も白布を道路にのべたるが如し

敵の大砲ハ恐るゝものなし

敵の砲台より打出す大砲は何れも測度に拙なるが爲め砲丸は常に我軍

隊の頭上に飛びて遥か遠距離の後ろに墜落するを以て雨の如く來りし大砲の彈丸も我兵中恐るゝものは一人もあらざりし

我大砲ハ悉く命中す

我野戰砲兵の發したる彈丸は悉く敵兵の幕營地に達し幾十となく張りたる「テント」を破らざるものは殆んどなく且砲台及敵の砲門を狙撃したる彈丸の如きは皆要處〳〵に命中し非常の好果を得たり

我軍清人捕ヲ生擒ル

防禦工事の完無

平壤の防禦工事中特に驚くべきは彼の砲台にして其築造は滿州地方より輸送したる巨木と大石を以て頗る嚴重なる築造ありしも之を守るの兵と戰術の拙なるは斯る砲台も何の効果を奏せざりしものなり

白旗を掲げたる兵多く射殺せらる

玄武門に向ひたる立見少將の一隊に向ひ白旗を掲げて降意を表し城内明渡は明朝を期したり敵將は必ず夜襲の策あるべしと早くも察したれば我軍は彼れの請ひを容れ專ら戰鬪準備に怠おく頗る嚴重に警戒したるに同夜の九時頃に至り彼れは夜襲にあらずして逃走し始めたれば我兵は兼て其遁路を扼し居る事なれば悉く之を射殺したり敵兵の死傷は此方面を以て第一とす死屍の積りて一ヶ所に多きは五十名少なきは三十名打重りて死したるは目も當てられぬ次第にてありし

◎竹内大尉遭難の顛末

九月二十四日台封附近にて東學黨の毒手に斃りて無殘の最後を遂げし竹内大尉が遭難の狀況を聞くに當初台射兵站部に於て其沿道附近に東學黨蜂起の說ありしより其偵察をなさしめんとて商人躰に變裝せしめたる本邦人二名及び韓人二名を派遣しせるに彼等は東學黨の處々に屯在して頗る不穩の狀あるを探知したるを以て不取敢兵站部に報告せんと歸途に就きし中途端なく竹内大尉が兵六十三名を引き連れ來るに會したれば兼て探知せる事實を報せしに大尉は然らば余自身之れを偵察し來るべしとて龍宮に至り府使の邸に入りしが東學黨之れを探知し府使の邸をば十重二十重に取圍みたれば兵士は發砲せんとしたるも大尉は未だ吾々に敵意あるや否や判明せざれば暫らく樣子を窺ふべしとて止めつゝある中無數の韓人闖入し來り劍に取り付き銃槍を捕り行かんとするより大尉も今は默し難く兵士と共に劍佩を拔き翻して切り拂ひしも彼は衆我は寡到底免れ難きを察し名もなき奴輩の手に死するは恥辱の事なりとて自から軍刀を咽喉に突き立て勇ましき最期を遂げたるは惜みても餘りある事共なり

因に記す大尉は騎馬に巧みにして如何なる暴馬と雖一度鞭を加ふる時は唯々意の如くなりしよしにて常に隊中第一の騎手と稱せられしよしなり軍旅多事の今日此勇士を失ふ誠に惜む可きなり

◎大孤山沖の海戰實話

九月十六日仮泊地を發し吉野、浪速、高千穗、秋津洲を先鋒となし松島橋立、嚴島、扶桑、千代田、比叡及西京丸、赤城を率ひて、先づ海洋島に向ふ翌十七日午前六時三十分同島錨地沖合に至り港内を偵察せしめしに異狀なし即ち大孤山大鹿島錨地に向つて進む

午前十二時三十分東北東に大艦首になり居れり)煤煙を認む數隻の氣船より發するものゝ如し即ち其必ちす敵艦隊たるを察し衆躍跳して喜

午后零時五分大軍艦旗を檣頭に揚げ各艦に令して戰鬪の配置に就かしむ是に於て兵氣益々振ふ次で西京丸赤城艦本隊の右側より左側に移り避けしむ此時左舷艦首に於て二隻の敵艦あるを認む我先鋒隊先づ敵の中央に向ふが如く進み次に漸次左心に方向を變じ敵の右翼に向ふ本隊も亦略ぼ一の運動をなす時に敵の陣形は不規則なる單横陣か又後翼梯陣なりしと認むれども定遠鎮遠中央に來遠經遠は其左右に靖遠平遠は又其左右に漸次小艦を兩翼に備へ艦數合して十隻なりき

零時五十分凡そ五六千米突の距離にて敵は先づ吾先鋒に對し發砲を始め吾先鋒隊は大抵三千米突内外に至て始て應砲猛擊して敵の左翼を通過す既にして敵の中堅は各艦首を我本隊に向け(兩翼數艦は運動既に乱れて種々の方向を執り居れり)吾に對して衝突を試みんとするもの〻如く且斷へず砲發し來る吾本隊は始終同一の陣形を保ち猛烈なる發射をなして直進す然れども殿後の比叡及扶桑は漸次向を來る敵艦に接近し比叡艦長は其儘直前せば或は敵の衝突を受けん事を慮り大膽にも艦首を鎮遠經遠の中間に向けて其間を突貫し次で敵の數艦と戰ひ之を切り拔けて再び本隊に向ひ來る其狀頗る壯なりき此時本隊は既に敵を通過し漸次右方に轉ぜて敵艦隊の背后に廻るの運動をなせり而して敵の艦隊は既に所謂陣形なるものを存せざるに至れり(此時分陸地の方より軍艦及水雷艇出で來りて敵に加はるを見受く水雷艇は六隻軍艦四隻新たに加はりをものの如し)

是より先き吾先鋒隊は敵を通過して本隊に合するの運動をなせしが比叡赤城の已に大危地に在るを認めしが故に斷然方向を反轉して之を救ふ事に決し大速力を以て赤城と敵艦隊との間に向ひ以て敵を左舷に見て砲擊を通過す故に此時は恰も好し本隊と共に敵を挾むの姿勢となれり

此間揚威は火煙を揚げて我前面を過ぎ大鹿島の方向に逃去するを見る已にして平遠の我前面を横切り左舷に來るあり盛に之を射擊せしが故に非常に混雜して終に火災の起るを認めたり時に午后二時半過

ふり此時廣丙も平遠の前面を陸地の方に向けて逃走するを認めたり
又超勇は戰始まるや火災起り此頃は盛に烟を發し居たり而して來遠
も亦此前後に於て火災を起したりと云
巳にして本隊及先鋒隊定遠鎮遠其他敵艦と挾擊す(此時定遠は前部に火
災起る)次で吾先鋒隊は逃走せし敵艦を追撃(結局來遠を打沈む)本隊は定
遠鎮遠を攻擊す松島定遠と並びしとき其三十珊半砲の榴彈に前部砲台
を射擊され砲台は勿論其近傍に大損害を被り且火を發す時に三時廿六
分なり又此時(三時三十分)に於て敵の致遠(又は靖遠)の沈沒するを認む
此の如くする時鎮遠定遠は餘の諸艦と合し本隊と先鋒隊とは大に距り
且つ漸く日沒に接したるが故に終に戰闘を中止し吾先鋒隊を召還す時
に午後五時半過かりき斯くて此時敵の狀態を見るに南方に針路を定め
威海衛に向け逃去らんとするもの丶如し然れども夜戰は唯だ我本隊の
混雜を招くのみならず現に敵は水雷艇隊を伴ひ居たるが故に之を求む
るの不利なるを認め翌天明を待ち威海衛沖に於て彼が逃路を遮ぎるの
策を執るに決し諸艦(此時西京丸比叡の成行き分らず唯僅かに東方に航
走するを認めたりと云ふものあるを聞く)を率ひ凡ろ敵と平行せりと想
像せる航路を執り以て天明迄航進せしに全く敵の隻影を見ず乃ち復た
前日の戰場に引き返せしに(此時赤城は本隊を離れて仮泊地に歸航せし
めたり)前日の戰地近傍に當て遙に煤烟を見しも其船体を見ざる内逃走
りて所在を失へり即ち前日火災を發しながら淺洲に乘上げたる揚威を
破ぶる爲め千代田に命ず外裝水雷を以て船底を破らしめ然る後歸路に
就き十九日早朝終に本地に歸りしに西京丸及び赤城は已に安全に到着
せるを見る比敵は一旦歸りて更らに出發本隊を索むる爲め海洋島を經
て前日の戰地に向ひたるを聞けり
右は本隊及吾先鋒隊の戰闘の概況之而して此戰闘中西京丸と赤城は各
自々然に本隊に隔離し各非常の危險に陷り一時西京丸は二艘の軍艦と
二隻の水雷艇の中に陷り僅かに五十米突の所より水雷を放ち掛けられ
しも幸にして其水雷は水底を潛りて他側に出でたるを以て幸ふして沈

沒の難を免かれ且つ艦体烟突氣管其他に殆んど無數の彈丸を穿りたるも幸にして破壞の患を免かれ單獨に仮泊場に歸るを得たりと云ふ而して赤城も亦一時敵の重圍に陷り非常の苦戦をなし終に艦長以下十名は斃れ二十名は負傷し「メイマンスト」は折れ到底破壞沈沒を免かるべからずと思惟せしも一番分隊長及航海長は傷痍に屈せず巧に艦を運轉し戦闘場裏より退き凡そ三四時間の後再び本隊に歸復せしは感ぜるに堪へたりと云ふべし又比叡は前記苦戦中二個の水雷を仕掛けられしも幸に命中せず然れども盛に射撃を受け損害甚だ多く「士官室に中りし榴彈の如きは一時に軍醫長小軍醫主計長看護手其他負傷看護の部署員并に機關砲彈庫員及豫備能索員を斃したりと云ふ且つ火災を起したるを以て終に本隊と運動を共にするを得ず即ち一先づ仮泊地に歸り負傷者を運送船に托し海門と共に戦地に向ひしと云ふ而して同艦は昨朝歸航せり

戦闘の結果は經遠致遠或は靖遠揚威超勇の破壞沈沒定遠來遠平遠の大火災にして其他の諸艦にも大損害を與へたるは殆んど疑を容れざる所あり

我艦隊死傷及損傷は別紙各艦よりの報告に依て詳かなり松島蓋し損傷中の最も甚しきものなり

終に臨み特に稟報すべきは士官下士は言を俟たず水兵火夫其他從僕に至るまで滿面喜色を帶び砲丸乱下鈦板裂け血雨降り骨碎け肉飛ぶの場合に際するも神色自若として活潑靜肅に各其戦闘の職分を尽せし一事なり而して此事に關しては各艦長の云ふ處殆んど符節を合するが如し眞に愉快に堪へざるなりと報じ來る伊東司令長官の心中左こそ喜悦を以て滿たされしなべし

◎赤城艦長の名譽

明治廿七年九月十六日帝國名譽の軍艦赤城艦は本隊及我先鋒隊と共に仮泊地を出で海洋島に向ふ十七日午前六時五十八分旗艦の命により海

洋島象登港に入り港内を視察す十一時十五分大孤山沖地方位に於て敵の艦隊を認む午後零時廿分戰闘配置に就く一時九分打方を始む此時定遠鎮遠の二艦正に我左右に在り我艦之れと戰對砲撃頗る力む是れより先き旗艦の命に依り艦隊の左側にありしも船の速力之に續行するに堪へざる不知不識孤立の勢をなせり同時廿分頃敵艦來遠及敵の左翼諸艦本隊に向ひ突進し來り其巨離僅に八百米突に達し我右舷砲は之に對し猛烈なる射撃を行ひ來遠をして艦橋上人なきに至らしめたり此時一番分隊長海軍大尉佐々木廣勝負傷海軍少尉候補生橋口戸次郎戰死す依て航海士兼分隊士海軍少尉兼子昱佐々木大尉に代つて後砲台を指揮す同時廿五分敵の諸艦我艦尾を通過せしが敵彈我艦橋を中り艦長海軍少佐坂元八郎太以下一番速射砲員二名即死二名負傷す航海長海軍大尉佐藤鐵太郎艦長に代つて戰を督す此時我前部下甲板に中りし敵彈は前部彈庫隣防火隊員四名を斃し一名を負傷せしめ「スチームパイプ」を破壊し去れり又前部上甲板に破壊せし他の一彈は喞筒砲員二名捕索手一名を斃せり既にして我艦尾を通過し去れる來遠致遠及び廣甲の諸艦我を追撃し來らんとするも「スチームパイプ」破壊せるが爲め前部砲彈藥の供給茲に杜絶し強て配給を行はんとせば勢ひ送風機は用廢せざるを得ず送風機の用廢すれば速力を減する事甚しからざるを得ず進退殆んど谷るの悲境に陥りしか我艦々首を左方に轉じ敵艦と相去る稍遠きに至るを機とし機關長海軍大機關士平部貞一以下機關部員のおしたる應急修理其功を奏し甚だしく速力を減せざるを以て俄かに敵艦の接近するの不幸に會せざると雖とも敵の諸艦は愈々速力を早め切りに我艦を追躡し來るを以て不止得針路を南方に轉じつゝ盛に艦尾諸砲を發して其追撃を止めんことを計り一番速射砲の如きは信號兵を配して發射を續行せしむるに至れり既にして敵彈我大檣に中る數發にして該檣を倒壊し去るを以て直ちに軍艦旗を前檣に掲げ捕索手員をして切斷せる大檣頂に旗竿を立てしめたり二時十五分來遠以下諸艦は既に我艦の後方三百米突内外の位置に達せしが來遠の放てる彈丸は再び我艦橋に中り航海長を負傷

せしめたり此時艦尾砲員砲撃最も勉む二番分隊長海軍大尉松岡修蔵代て戰を督し掌砲長海軍上等兵曹進藤多榮治松岡大尉に代て前砲台を指揮す同時二十分我艦尾四番砲の彈丸來遠の後部甲板に命中し該艦をして烈しき火災を起さしめたり敵の諸艦は該船を救んが爲め速力を減じて該艦に集りたるを以て我艦は漸く敵を去る七八百米突の所に達する事を得たり同時二十一分航海長治療終り再び艦橋に來り松岡大尉に代れり同時三十分敵艦を去る既に遠きを以て兵員の休止を命じ速力を緩め「スチームパイプ」の修繕に掛れり此時遙かに我本隊は來遠鎮遠を猛撃しつゝ近づき來るを見之れに合せんが爲め針路を北方に轉せり同四十分軍事點檢を行ふ兵員を補充し續て休憩を命せり四時五十五分「スチームパイプ」仮修復終りたるを以て全速力を命じ五時五十五分本隊と會せり

海洋島沖の海戰如何に激烈なりしかは一讀一想以て詳細を悟る事を得しならん

◎義州の敵を撃破せ

第一報

追撃軍の前哨斥候は義州を距る一里の地に於て敵の騎兵を認め互ひに放火を開始し結局敵は鴨綠江右岸に向つて敗走せり

第二報

我騎兵は義州に於て敵の騎兵に衝突し射撃中歩兵之を援け敵兵遂に江北に退却したり

第三報

我兵一中隊及騎兵若干は去る八月在義州の清國偵察兵に衝突したり而して敵は鴨綠江を渡りて逃走せり

鴨綠江の右岸には清兵の幕營百五十餘あり

第四報

敵は初め義州に於て防戰せんとし二千五百人餘を分遣し防禦工事を施したれども皆破壞して退却せり我兵の衝突したるは約百五十の騎

兵一隊のみ義州は全く我軍の有に歸したり

第五報

義州に於て敵の斥候隊と衝突したるは第五師團の騎兵一分隊と歩兵二中隊なり

第六報

鴨綠江右岸の敵は一万二三千江の上流及下流に於て十數の砲壘あり其力甚だ大ならず

第七報

我軍は直に右岸に出で敵を殲滅せんとす

平壤大捷戰以來精鋭北進の我軍は些かの衝突ありしのみにて既に義州を占領し敵は鴨綠江を隔て北部に退きたる事明白なる事實なりとす

●第一軍鴨綠江畔九連城の大勝利

十月二十三日佐藤大佐の枝隊水口鎮の上流にて鴨綠江を徒渉し敵の歩兵三百人騎兵六十人を破りて敵背に出づ軍は二十四日夜義州城外に於て潛に鴨綠江に架橋し二十五日夜明より第三師團軍橋を渡り右翼前面虎山に據りたる敵と開戰し大迫旅團長右翼の峻嶺に登り敵の側面を瞰射するに及び敵遂に支る能はず九連城の方向に敗走す此時敵の四縱隊旗を並べて猛進し來り我正面の山上に登りて猛烈の射擊を爲し我兵大に力戰す此時立見少將其旅團を率ひ虎山の左翼を迂回して敵の背後に出で烈しく其側面を衝き大に敵を窮追し蘆河を徒渉して敵の幕營を奪ひ大砲十門を分捕し此夜第三師團と共に九連城背後の要地に露營せり亦當師團の前衛も此附近に露營し我は軍司令部と共に虎山の東北に宿營せり此夜敵我陣地に向ひ頻りに大砲を亂射す二十六日朝四時半より第三師團と共に三道より敵の背後に迫れり然るに敵は夜明迄に逃走せし故我軍直ちに之を占領し當師團は鳳凰城及大東溝に向て追擊兵を出せり敵は九連城附近の要地に堅固の防禦工事を爲せり其兵大連灣、旅順口、小、站、蘆臺等の精兵にして宋慶之を總督す凡そ十八營なりと我軍死傷

將校七名下士以下七十名敵の死者百余名分捕大砲三十四門大小銃砲彈藥及び天幕無數ありと我軍の勇猛なるは今に始めぬ事ながら九連城は敵の根據として守備嚴なる處なれば我軍隊の攻擊を試むるに當り頗る困難あらんと思ひ居しに計らざりき斯く容易に陷落せんとは陸軍萬歳帝國萬々歳

●第一軍の配置と敵の勢力

第三師團の一小部隊は昌城附近に於て疾く鴨綠江の右岸卽ち滿州に入れり

其一部隊は平壤より朔州に出で水口鎭より鴨綠江を右岸に渡る(是卽ち佐藤枝隊)

其一大勢力は龍川に於て軍司令部の旗下に屬し鴨綠江の下流より彼岸に達す

他の一大勢力は義州より遙か南方に於て一種の役務を執る

第五師團の第十旅團は混成旅團として中央より直進して正面の攻擊に任ず

其第九旅團は殿後にありて他部隊に次で前進す

敵の勢力は鳳凰城、盛京沿岸及鴨綠江畔に於て七万五千と稱せども實數は之より遙かに少なく又九連城附近より鴨綠江畔に至る各地に分屯する兵力は約二万以上にして此内には平壤の敗兵も少なからず其携帶する兵器も稍良好にして亦鳳凰城以北守備兵の比にあらず去れば愈よ總攻擊に着手せし上は我軍も多少彼等を鏖殺するの仕樂ねあらん

●九連城の敵將

九連城に強大なる防禦工事を施し二万内外の大兵を率ひて之を守りながら一二回の小衝突に膽を奪はれ我軍の實力如何を見極る事も出來ずに敗走したる清國の弱將の官職姓名を擧ぐれば左の如し

四川提督(我中將相當官)　宋　慶

河南河北鎮總兵(我少將相當官)　劉盛休

●第二軍の上陸

山縣大將か率ひたる第一軍は既に九連城を乘り取りたり而して大山大將の引ひたる第二軍は愈よ去二十四日より清國盛京省の東南岸貔子窩の附近に於て上陸を初めたり

該軍は海面に大艦隊の掩護を受けしを以て更に之を顧るの要無く又陸地に於ては無論敵の强擊を受るならんとの見込にて豫め充分の用意を爲したれども幸ひにして格別の攻擊を受けざりき

敵の攻擊格別ならず風向も至極よろしかりしを以て三日間に滯り無く上陸を了れり

●貔子窩の地勢

貔子窩は前に裏長山列島を控へ旅順か盛京省東南海岸を經て九連奉天に通じ又分岐して遼東灣に沿ひ牛莊より奉天北京に通ずる最も緊要の地點にして遙かに關東半島の卒制地たり

吁、我軍隊は遠く異境に踏入し陸には旌旗整々として攻圍進擊を試み一蹴して成歡牙山より平壤を陷れ海には艦隊堂々と虛實を斗りて一擊の下に豐島黃海の轟沈を奏す　天皇陛下の威稜と忠勇なる軍人の勤勞によらすして何ぞ克く偉功を灼す事を得んや以て國威を發揚し以て帝國の榮譽を輝すをを得んや且や日本國民は一種特有外國無比の大和魂を備ふるに依り國難に殉し君主の爲めに命を致す事兒童走卒に至る迄敢へざるに已に既に覺悟する所あり斯る至大至剛の精神を以て今日其局難に當り死力を盡して他を顧るおき連戰連勝亦理りなる哉爾來海陸彌々進んで奉天を衝き北京を略すの絶快なる報を手にせば綴りて以て冊子とし讀者と共に萬歲を謠はん

●鳳凰城占領の詳報

九連城發にて山縣大將より大本營へ着したる公報左の如し

十月三十一日立見枝隊は鳳凰城に入る敵の一部は奉天府一部は海城一部は大孤山方向に逃走せり內重なる各統領は奉天府方向に退却す地方人民の意向は清國兵の暴掠を忌み我軍を敬愛す

●第二軍の大勝利

第一師團は十月六日金州城を奪領し七日大連灣附近を占領せり金州の敵は步兵一千人騎兵百人なりと云ふ此外大連灣には三千百八十人の敵ありたれども皆旅順の方向に退却せり我死傷は士官以下十人餘あり敵の死傷も多からず

●大連灣占領の詳報

黑井大尉は大連灣より歸へりたる薩摩丸にて鵜子窩より歸着せり十一月七日より八日の午前に掛け陸兵は大連灣を攻撃す守兵は悉く守を棄てゝ旅順口の方に走る八日午後には大連灣全く我有となる艦隊は灣內に布設しある水雷を破壞し九日午後には艦隊及び水雷艇とも盡く安全に大連灣のヂュンクベイに碇泊せり各砲臺の哨兵は初めに皆遁走せしを以て砲臺との戰爭なし運送船は續々同灣に回航す

●大連灣占領の續報砲八十門を分捕る

大連灣には砲臺六個あり大砲各種取交せ八十門其最大のものは二十四珊あり我軍は彈藥と共に悉く之を分取したり大連灣の最も狹き處凡そ我三里餘の間敵の電話あり亦我手に落つ

●順旅口の占領

十一月十一日上海發の電報によれば只今當地へ達したる天津よりの公報に依るに旅順口は日本軍に略取せられたりと芝罘より來電ありしと確信すべき筋より聞き得たり

旅順口の激戰

第二軍は十一月廿一日の拂曉より旅順の後方陸諸面の諸堡壘を攻撃せり即ち第一師團は右翼に混成第十二旅團は左翼に展開し攻城砲は其中間に位せり敵は終末に至る迄頗る頑剛の抵抗を爲せ共も遂に第一師團午前八時半キホウ營樣兵場の西方にある堡壘團を占領し午後二時旅順に侵入し四時黃金山の砲台を占領せり混成旅團午前十一時半八里店東南の堡壘團を占領せり廿二日の午前に於て軍は全く自餘の海岸諸砲台を占領せり我死傷は將校以下二百余名敵の死傷捕虜は算なく戰利品中殊に大口徑の架砲彈藥等は甚だ多し此攻撃や聯合艦隊は唯旅順口の沖合に在つて聲援をなせしに止まると云ふ實に激戰は五六時間に渡り敵壘よりは百余門の大砲を連射し我亦烈しく應戰共たるを以て一時硝煙天に漲り凄まじき光景を呈したりとす

旅順口の要害

旅順口は世界屈指なる三砲台の一に數へらるゝ堅固の砲台にして清國第一の要害なり明治十七年佛國の將クールベーも近寄る能はざる場所なりと而るに我陸海軍は一朝にして之を略取す我皇軍の精鋭なる事各國其比を見ざると云ふも强ち誇大の言にあらざるなり

同砲臺

大砲の總數五十九門此中黃金山砲台は南向旅順口を眼下に瞰下し正面より攻撃する者あらば一擊の下に軍艦を碎破するの勢あり北山砲台十二珊三門あれども最も要害の地なり此十二の砲台其一半は旅順のドックを保護し他の一半は金州よりの通知をコンマンドするものと知るべしドックは二ケ所にして一は旅順の市街に接し他の一は溜池に接す

海城の戰と蓋平城の占領

第一軍は進んで海城を略取せしに遼陽方面の敵は一月十七日午前八時

頃より遼陽普蘭屯牛莊の三街道より海城に向ひて攻撃し來る正午過ぎには其戰線を二里余に延伸し我前哨の前方約千五百乃至二千米突の地に達せり第三師團は海城北方の陣地に據り午後四時頃まで防戰せし後攻勢を轉じ敵の左翼に迫り午後六時過ぎ終に之れを擊退せり敵の兵力は一萬余にして大部は北方及西方に退きたり一部は牛莊方向に退きたり戰利品は子母砲(二百年前の後裝砲)一、大砲一、施條銃七十、小銃彈藥四十五万發、刀一、旗四、太鼓一、喇叭一、毛皮外套十五、其外捕虜五名なり

蓋平城の敵は南方蓋平河に沿ひ凡ろ千三百米突の線を防守せり我部隊は一月十日午前第五時卅分より之れを攻撃し九時三十分全く蓋平城を占領したり戰鬪四時間に渡る敵の抵抗は頗る激烈にして金州攻撃の比にあらず敵は既に敗走し北方營口即牛莊方面に敗走せり我騎兵の報告に據れば正午頃一万の敵は營口街道上前進店に來り敗兵を收容して共に營口方向に退却せしものゝ如し敵の死傷大約二百傷者不詳俘虜約百五十我死傷將校以下約五十俘虜の言に據れば我に對せし敵は聶の率ゆる八營砲四門張の率ゐる五營なり外に除邦道の指揮する十八營の兵あり之云ふ

海城の戰は第一軍に屬し蓋平城の占領は第二軍に屬す而かして蓋平城占領の結果は第一第二の軍隊相連絡を通ずるを得るに至りしあり

榮城灣占領詳報

明治廿八年一月十九日夜吉野、秋津洲、浪速、高千穗の四艦は既に芝罘の沖を通過し十一時近く一直線に山東角の方向に航進せる途中艦首の左舷に方り遥か彼方の海上に火光の浮沈するを發見す暫くして漸く其數を增すものゝ如し此時月未た昇らず望遠鏡を取り星影に透かして看れは螢に似たる無數の紫燈波間に明滅するから前灘を渡るなり、知る是れ本隊及び第二第三遊擊隊及ひ水雷艇隊か先發運送船を護送して大連灣より榮城灣に向ふの途中なることを此に於てか針路を南東に轉じて進行し廿日午前二時二十三分南々東の方位に始めて山東角燈光を認むるを

得たり二時半月出て本隊とし。距離漸く近き玄を以て速力を減じて徴進す廿餘艘の運送船は陸軍中將佐久間第二師團長及陸軍中將黒木第六師團長以下幕僚等を載せ十數隻の軍艦が隊列を整へ舷燈を掲け項背相望んで曉に榮城灣に進入せり

本隊及ひ第二第三遊擊隊に先つて第四遊擊隊筑紫、大島、赤城、摩耶、鳥海、愛宕は先海岸近く灣内に進入し直ちに陸戰隊を組織して上陸せしめたり此時敵は急造肩檣内に備ふる野戰砲四門を以て多少の防戰を試みしが我れは艇砲を以て之れに應戰玄本艦よりも砲擊して敵を退却せり故に我陸戰隊は一兵を損せずして上陸する事を得たり六時本隊及ひ第一遊擊隊は孰れも灣口を警戒し第二第三遊擊隊は灣内の左方に碇泊せり折柄曉の空一面に掻曇り雪さへ降り出て加ふるに濃霧海面を籠めて咫尺を辨せず衝突の虞あるを以て運送船は遙かの沖合に留り容易に入灣する能はず暫くにして雪止み霧晴る、此時秋津洲は陸兵を上陸せしむる爲め第一遊擊の各艦より御せる端艇並に小蒸汽を曳いて海岸に近く進入したるに特務艦八重山並に相摸其他の諸砲艦より數發の大砲を放て敵情を窺へども陸地よりは更に應砲せず兎角する中に運送船も悉く海岸の小灣に碇泊玄毫も抵抗なく玄て茲に全く榮城灣を占領し我陸兵上陸するや否や雪中を冒し駈足にて榮城縣に達し直ちに大山陸軍大將は着陣す

威海衛陷落

威海衛攻擊は一月三十一日を以て始められたり而して第二軍は二月一日午前六時頃より百尺崖所西南に當る高地の攻擊を始め艦隊は百尺崖所の砲台を砲擊す第六師團は午前二時より前進を始め九時半敵の防禦線の大部を占領し孤山後に進み十二時半百尺崖所の砲台を陷れ我有に歸す敵艦は劉公島内に在りて砲台と共に我陸海軍に向つて砲擊す然れども我艦隊は遂に敵艦を封鎖し砲擊益々激烈なり而て北洋艦隊の最後の余の内なるべ玄と悦ば玄めたる折柄端ふく國民をして悲愁の感を

起さゝるめたるは薩南の一快男子と云て聞へ高き

陸軍少將大寺十一旅團長

の陣亡あり實に惜むべき事あらずやり

二日第二師團より出ゝたる二個の大隊より成る偵察隊は敵の抵抗を受けず午前九時より十一時の間に於て威海衛に進入し陸正面及海岸の諸砲臺を悉く占領せり

帝國海軍の大勝北洋艦隊の全滅

一月三十日第三號水雷艇と港内に進入を試みたれども占領砲臺にて敵の水雷艇と見違へたるものと見なし砲擊劇く又卅一日は打合をなし置き進入の筈の處非常の暴風荒れとなり目的を達せず艦隊は去る一日一時榮城灣に引上げ翌日少しく風和らぎたるゆゑ出港水雷艇砲艦は榮より本艦の如きも大砲艦体凡て氷を以て張閉其厚さ三吋乃至五吋に至れり

昨日は第二遊擊隊第三第四遊擊隊は劉公島、日島砲臺砲擊筑紫一彈を受け即死二名負傷者數名あり敵艦隊も灣内運轉東岸砲臺を砲擊せり同夜は水雷艇を以て進入を試たれ共防材堅固警戒非常に嚴重併し少しく防材を破壞するを得たり其後もまた防材は破壞を試ろむる筈又た西口砲臺に海軍より人員を出し敵艦隊を砲擊せしむるをに着手せり目下東口砲臺にて使用し得る大砲は廿四拇三門、廿一拇二門十五珊一門あり去月三十日廿四拇一門は敵艦隊砲擊のため破壞され海軍兵即死二名重傷一輕傷一名

定遠鎮遠の擊沈

二月四日夜第一水雷艇隊は西口を警戒し第二及第三水雷艇隊は月入り後東口防材の切目より入り敵艦を襲擊し定遠は確に破壞し靖遠も或は座を破りしやの疑ひあり我水雷艇隊破損は八號水雷艇機關室を擊たれ機關部員悉く死傷其他は歸途防材の切れ目に在る淺瀬に乘り揚け且敵

の發射を受け半は沈没鈴木少尉外二名倒死一名負傷第八號水雷艇第十四號水雷艇は防材又は暗礁に觸れ舵又は推進器破損第六號水雷艇は小銃弾四十六發ホッチキス砲一發第十號水雷艇は小銃弾十發の命中を受け其他の水雷艇も多少發射を受けたるおらん併し孰れも死傷なし前夜三日夜)第二第三水雷艇隊西口を警戒し第一水雷艇隊は月入り後東口防材切れ目より進入し第三號小鷹及び第十一號水雷艇にて七發の水雷を發射鎮遠威遠及砲艦一艘を沈没せし処たり水雷艇隊は船人共に無事なり

艦隊は絶へず港外に運動警戒し陸上砲臺と協同し日島及劉公島端の砲臺を破壊せんとす

二月六日我艦砲大砲擊の際敵の水雷艇十余艘出來る因て第一遊擊隊をしてこれを追はしめ遂に

水雷艇　十二艘

小蒸滊　二　艘

芝罘隣灣の龍門湊迄の陸岸に於て破壊若くは乗揚げ不用に歸したり

日島砲臺の陷落

二月七日午前七時百尺崖所なる我か占領砲臺より發したる破裂弾は日島砲臺の火藥庫に命中して之を破裂せし処我軍之を占領す殘る敵壘は劉公島に在るものゝみにて我軍は現に同島に海陸砲擊

丁提督降を我軍門に乞ふ

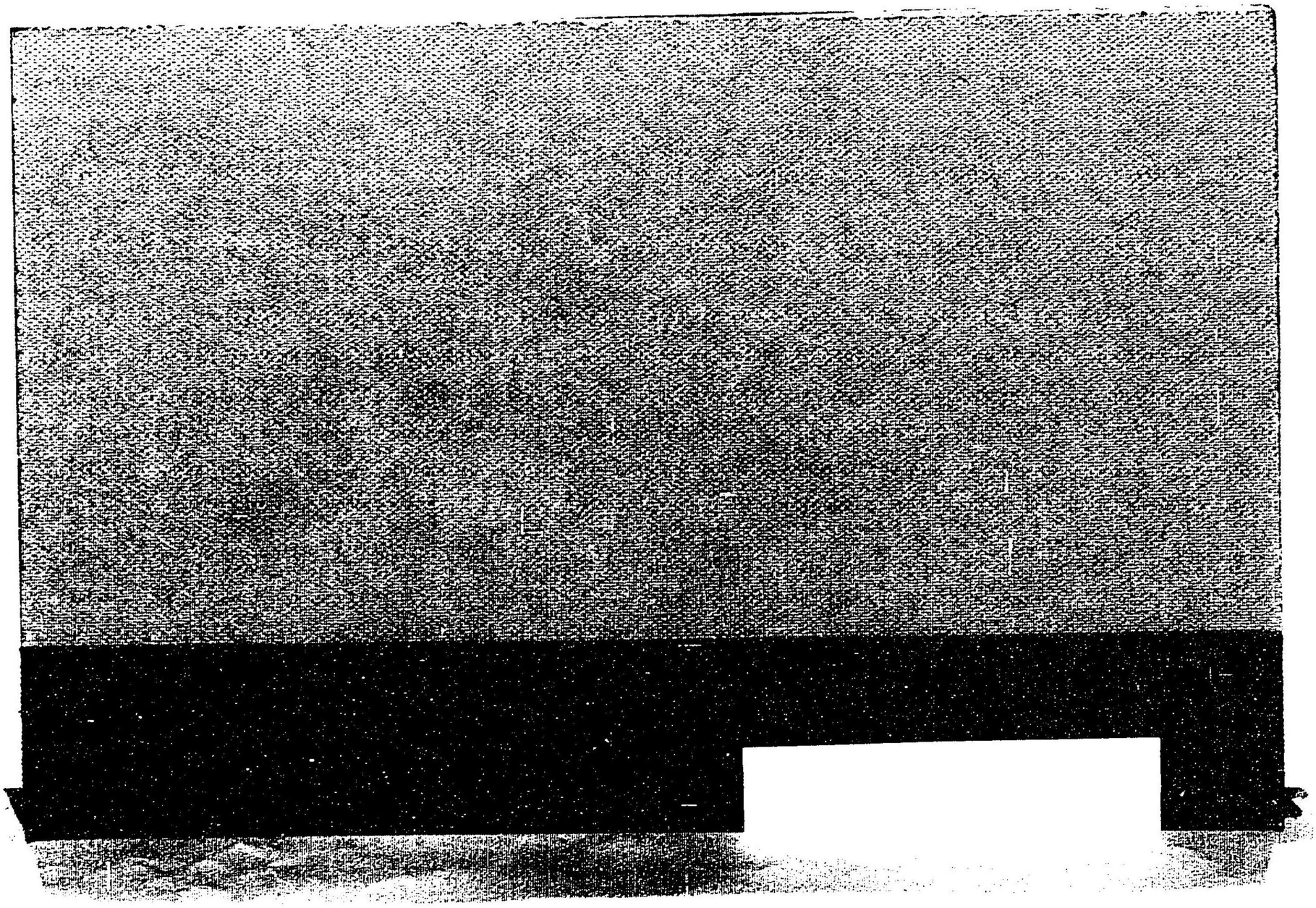
二月十二日敵の砲艦一艘白旗を揚げ來りて丁提督より軍艦兵器砲臺等は總て差出すに依り陸海軍人及西洋人人民の生命を助けられんことを願ふ旨申し來れりと依て我は丁提督の降を納れ鎮遠濟遠廣丙及砲艦六隻都合十餘艘並に劉公島砲臺を受取りたりしが然る後終に丁都督は自殺を遂げたり　(了)

明治廿八年二月廿一日印刷
明治廿八年三月一日發行

發行者　東京淺草區小島町十番地　山崎曉三郎

印刷者　東京神田區柳原河岸第十一號地　龍雲堂　大塲沃美

發賣元　東京淺草區小島町十番地　國華堂



特47
29

日清大合戦

国立国会図書館

002656-000-3

特47-29

日清大合戦

山木　樵夫／編

M28
ACB-6091